和泉川荘志

六

ル 4
6317
6

利根川圖志卷六

下總　布川　赤松宗旦　義知　著

飯塚文庫
荻野藏

香取浦　香取志云ふ此の海西の方ハ利根川ゟ續き東ハ銚子ゟ至る凡十里餘北の方ハ潮來ゟ至りて一里餘乾ハ霞ヶ浦ゟ北て是まて十里餘艮鹿嶋息栖ゟいたる支三里かくのごとき大河たるを以て古へより渡り難き浦とせ故ゟ香取の浦同ど海又沖ゟ詠る古歌多くあり先海と詠るハ万葉集ゟ

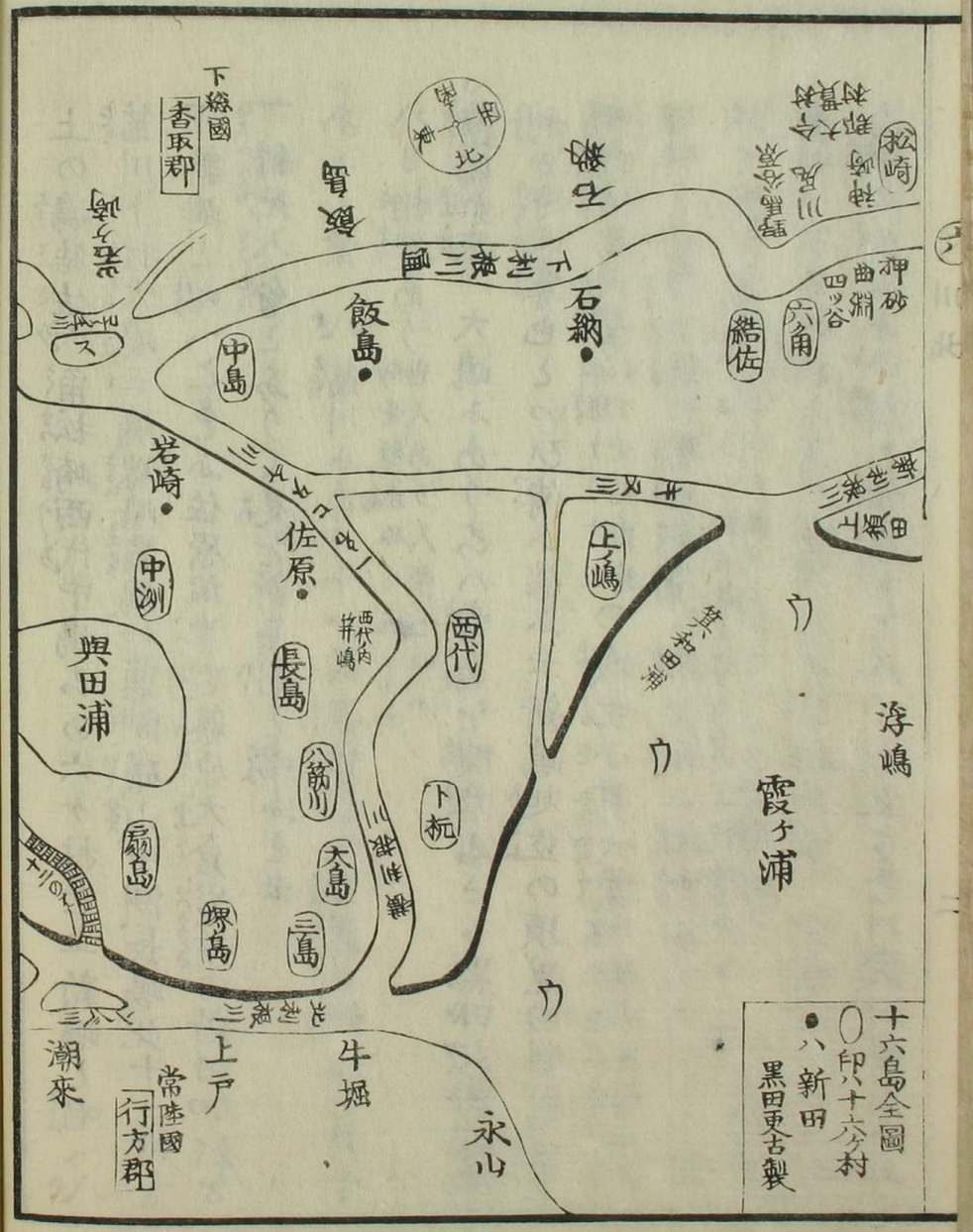
人丸　大舩の香取の海ゟ慍おろ〳〵如何ゟる人ろ物思ハざらむ又浦と詠るハ續千載集ゟ定家　夏衣香取の浦の假寐ゟ浪のよる〳〵通ふ秋風まて沖と詠るハ家集家隆　今日ろハ幣帛取祭る舩人の香取の沖ゟ風向ゟ形り此外諸書ゟ多くあり

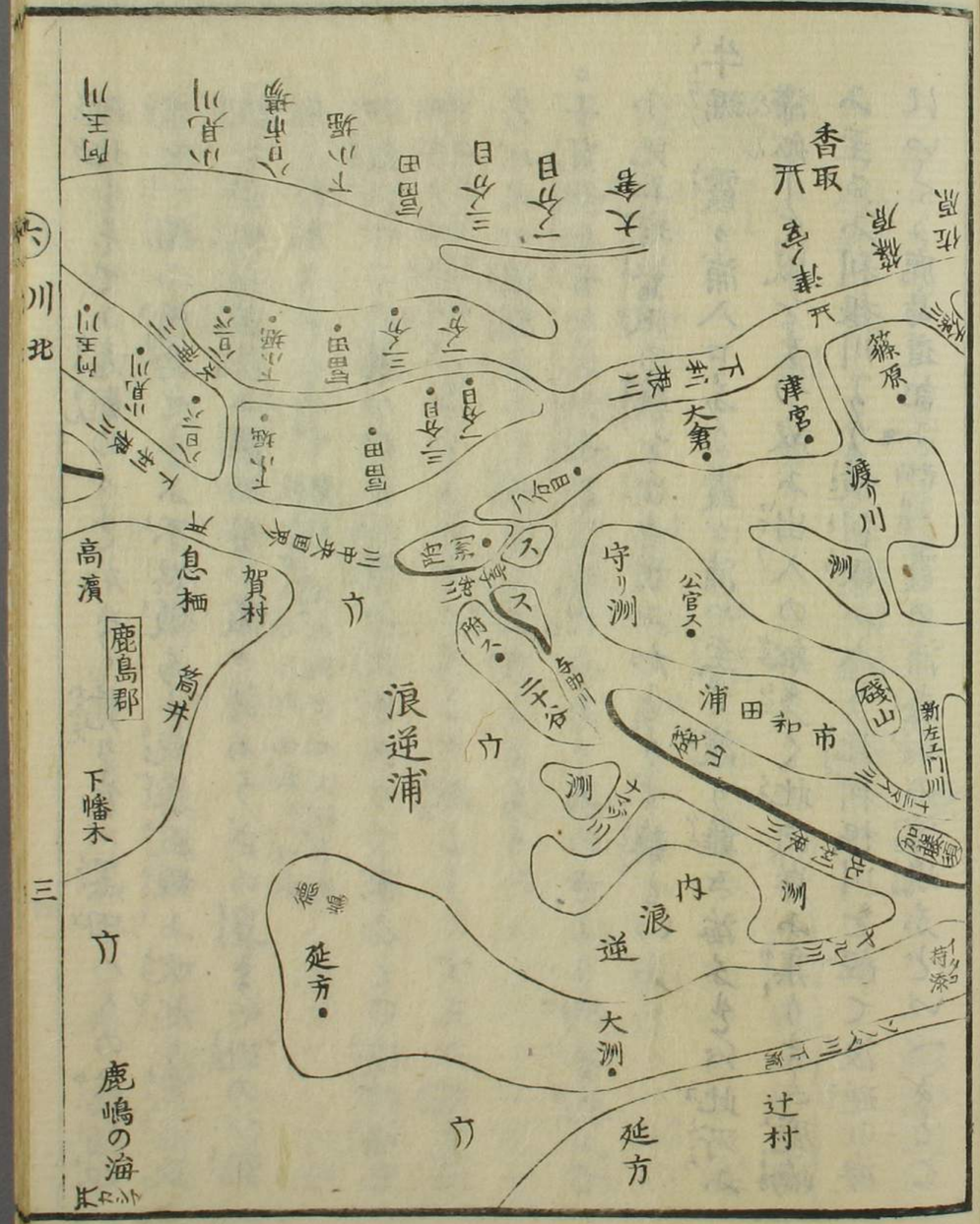
十六嶋　本名新嶋といふ香取浦洋中ゟあり香取志云斯て數百

98-72

の星霜を經るまゝ洋中ゟ自ろら洲出來年を積て稍大き也
爰ゟ天正十八年水陸田を開き始め上島まゝ成就を石田主馬
亮といゝる者吉田左太郎ゟ就て　東照神君ゟ言上を神君
紀こゝめされ吾治國の始め新嶋を開くもと願ゟ所ゟり平相
國清盛自已の功を以て兵庫の築島を立らる今家康ゟ德ゟ已
て新島おのづゝら出來を喜悅の至りと仰らを八筋川西代ト
杭班田成就ゝ同十九年大久保重兵衛ゟ仰せて夫役を許さを
らを蠲符を賜ゝる慶長十年長嶋出來同十九年六角をゑらき
元和三年石納飯嶋寛永元年大嶋を開き同三年嘉藤洲同五年
堺嶋同七年結佐同八年中洲同十五年礒山扇島ゟれを然きバ
天正十八年ゟり寛永十五年ゟ至るまで三代五十三年ゟゝて
十六嶋班田の功成就をきを新嶋といふ此島殘らび　國初
の御先蹤ゟ隨ひ後御両代も同ゝく蠲符を賜ゝる云云

上の嶋結佐六角松崎西代中嶋古の六ケ村を上新嶋と唱ゝ八
筋川ゝト杭大嶋三嶋堺嶋扇嶋加藤洲礒山中洲長嶋此十ケ村を
下新嶋と唱ゝこをゟ佐原組津宮篠原大倉岩崎の新田四千余を
一耕地入會とゝありて是を新島料と唱ふと云
○あゝん堂　八筋川ゟあり十一面觀世音を安置を例年七月十
八日相撲あり御堂惣赤ぬゝあるゆゑ世人あゝん堂といふ
○藥師如來　大嶋ゟありこゝ當島を開草ゝさる黑田玄蕃亮則
利ゞ守本尊也といひ傳ふ諺ふ云新嶋起立の頃黑田則利と常
州行方郡大堀半堀より十五丁北堀内村の城主小貫大藏高九万石餘行方
家老と云と常陸下総の堺目爭論ふ及び互ふ舩中ゟてアカトリを
以て泥を打合之アカトリ和名抄ゝ犀和名由土利洩ニ舟中ノ水ヲ也ゝ
其日ハ双方相引ふゝり翌日互ふ軍舩を催し牛堀前ふかいて
合戰を然るふ小貫ハ飛道具を以て打立ゝをバ黑田勢大いふ


十六島全圖
○印八十六ヶ村
●八新田
黒田更古製
浮嶋
霞ヶ浦
田沢潟
上嶋
西代
下板
佐原
長島
八筋川
大島
三島
堺島
扇島
興田浦
中洲
岩崎
中島
飯島
石納
佐賀
六角
砂取
湖曲
谷四ツ
野馬分藤
川尻分藤
神崎
松崎
牛堀
永山
上戸
常陸國
行方郡
潮來
下総國
香取郡
北
東
南
西


北川
浪逆浦
内浪逆
浦田和市
守り洲
公官ス
磯山
新左エ門川
洲
大洲
延方
辻村
鹿嶋の海
息栖
賀村
高濱
鹿島郡
下幡木
筒井
延方
大字
取
香
津宮
大角
大字
一ノ目
二ノ目
三ノ目
宮田
下小堀
小見川
阿玉川
原
殊
佐
原

敗北してゐ急難のがれとかさ〳〵覚りをべ黒田へろの藥師如
来を一信ゐ祈念せしゐ不思儀ある哉暴風頻ゐ吹起り荒波歇
船を顛倒せ其隙ゐ黒田勢ハ霞ヶ浦めうぎの鼻まで逃のび難
ゐ〳〵引取々るとうや（是を世ふどろ打合戦といふ 後ハ公の御沙汰ゐ任とも）

。加藤洲十二の橋ハ川の両邊ゐ民家ありて家おとの通行橋也
（両岸ゐ橋杭有て中ゐ板を架せ）もとより十二あるが時と〳〵て十三ゐ成ることの
をバ又一橋闕るゐと極めて出來るとあり

。子育觀世音加藤洲長泉院境内ゐあり古の寺より御夢相ゐて
小兒五疳驚風の藥を出せ世ふかとうず藥といふ

牛堀　霞が浦入口ゐあり霞が浦ハ至て渡り難き海ゐをべ此所ゐ
滞船して風をまつ故ゐ出入の船多く此河岸ゐ集りまゐ鹿嶋
ゐ至るゐ利根川より横利根ゐ入り北利根川を經て浪逆の海
にいゐる鹿島道記ゐ（仙臺君）霞の浦志田の浮嶋ゐどいへるとこ

ろ船のうちより見ヒさるまゐ右のうさとるうゐ筑波山こ
のも彼面の峯も見えさり漕行船の追手ゐれば見るがうちゐ
むうゐ山々も跡ゐ遠ゐてゐゐやふるき詩ゐ汲水凝山動揚帆
覺岸行といへるもされぐら目前の景氣ゐおひやらるゝ海
濱ゐ海人の家居ありて前の杭ゐ網をうけわゝ磯邊ゐ小舟引
そて物さむゝる住居のさはぐゐよく繪ゐも似さりゝうと船
でさゐつらはえつきて見るゝこれも跡ゐ成ぬ昼つうさ風も
ちさうゝ岸ゐ船をよせて風のうゐるをまちゝるゐ雨ゐど
ろゐ降きさうゝれば笘引おゐゐほど心もいとむづうし半時
斗して雨風やゝ名殘の雲も晴ゝさりて空も見るがうちゐき
よらうゐ日影の見えゝるゐ岸の芦の葉ゐかゝをる露をぞら
くと風の吹みぐゝさき涼しさいやまさりぬ爰ゐ船うけたる

はゝふてとり子やうれものとりむらき人々ふもせゝえをづ
うらもたたゝめて時うつり待れバやうゝ日もかさふれぬさ
らバとて漕出し行ふ潮来のむゝむふあさりて香取明神入海
をへゞて〳〵神々〳〵たゞゝあむさる木の間より玉垣ゐの見
え侍るいとさふとくをがまれさせ給ふ海よりうちいる塩と
水とのみふとなをバ浪たゝく舟たづゝふらびされども所の
もれども引舟多く出して綱はあて先ゞち引々をバ日高くか
もふ岸ふ舟着さり潮来ゝ祢てハ暮て此礒ふハつくべゝりゝり
と舟のうちれ者共もいひあゝりゝをども今朝よりれ追手の
風ふさそハれ漕とも覺えバそしり行々るゐ名申剣そくるゐ
どうやとおゐゐ舟よりあゞりておもふゝさふ入侍りゝれバ
あるゝの出あひてもてれしいふ斗ふし此宿のあるゝハとれ
ふちふをふゝ名もれふれバときて心ふゝりあり参議源宗

尭卿水戸御使たまりくゞものふど送り給ふ此君も二日三日
のうち常陸れ國ふ下りふべき沙汰あり爰もかの領しるふ
所ふれバ何くをと驛路の人馬おゐく出して旅の舍りれこゝ
まで御ら〳〵ふふけ武藏野より先ゞちいひをらせ給ふとぎ
みうちれ人々ときてそれさゞせり
同安永道の記ふ香取の浦ふ舟よするも浪ハたづゝふれど風
むゝひて舟おそく日も暮ふゝと舟子どもいゝをバ西ゝ遠
く見ゆる森の木立そのゝさときこゆれを遥ふをゞをぬゝづ
きたゝ浦ふをの立もゝら祢ゞ
音ふのを聞て扨とゝる夏衣かどりの浦ふよゐる夕ふを
銚子といふ湊より入〳〵ふ舟ども追手ふれバ此浦ふ着ゝると
て帆柱のをたて〳〵たゝふゞる舟あまゝ見ゆ是ふん香取の浦と
いふ

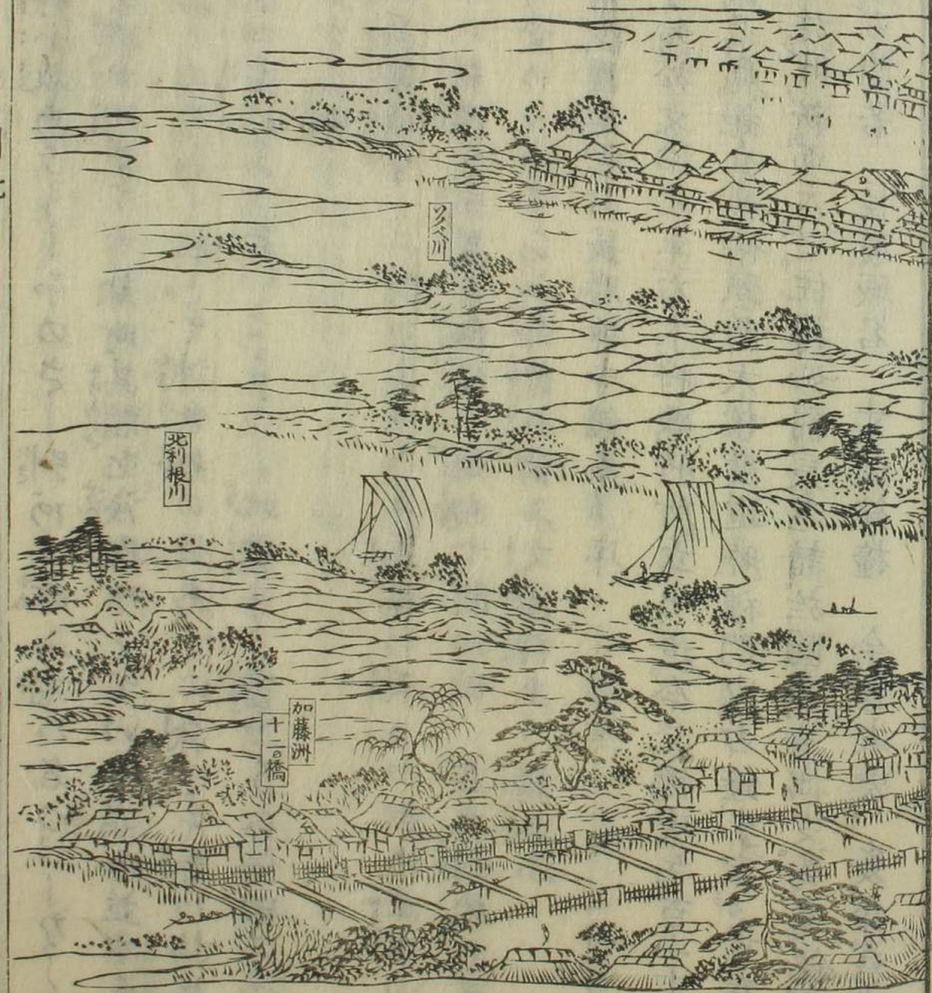
帆柱ぞみをはくしれる大船のかとりの浦の見るめから衍
どかくてゆ〳〵川岸の田面を越て霞の浦見ゆるもそるきし
志ら浪の高く打よせる浦のあゞめ折うら夕附日かゞやきあ
ひて船中第一れ佳景ふり

入日影色とる雲ふ立そゆる霞れうらの水れ志ら浪

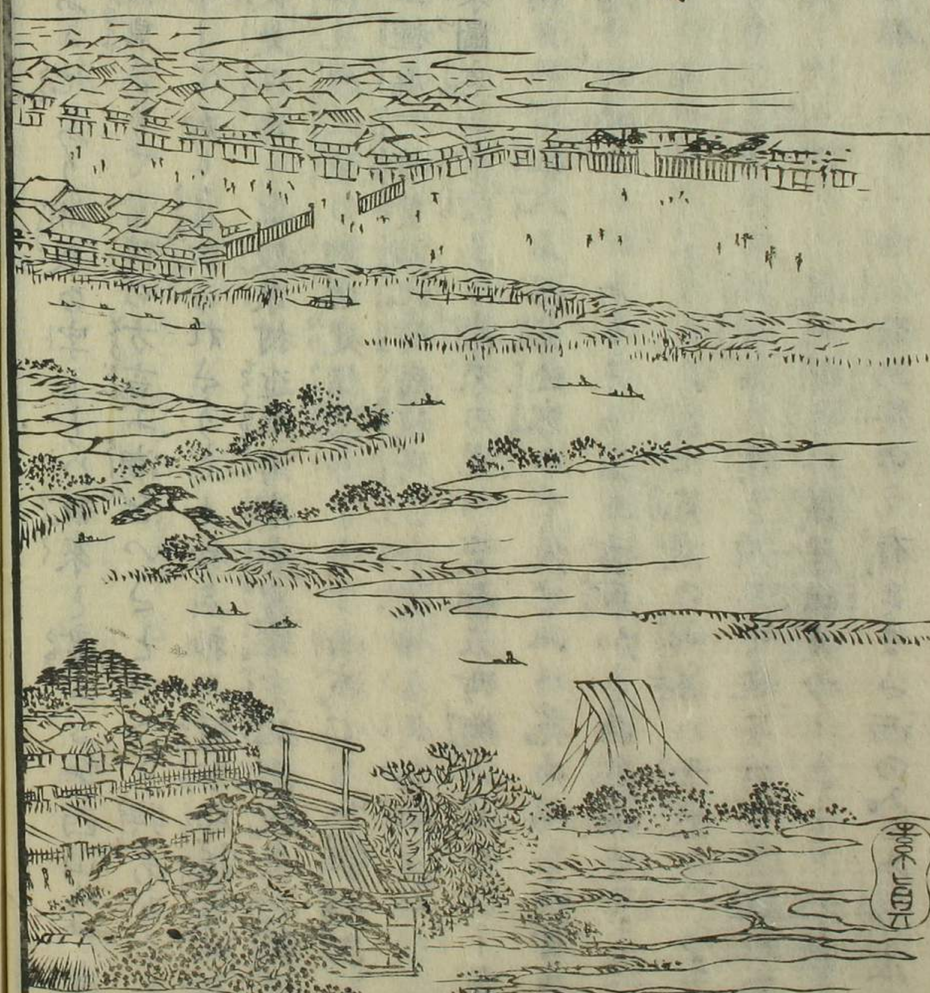
まさ信田の浮嶋みどりもゞしく浦のあれさふ木ぞち一もぢ
引ひさゝきるやうふ見ゆるいふも元ふらゞ

浦の名れうすをも夏ふそるゝとや見るめ世ぞらぬ信田れ
浮嶋筑波山遠うら衍ども雲立こめて見えゞ日くれぬれゞ河
岸ふ蛍のみゞも飛あまさ見ゆるもそゞれもれうら夜いさ
く更ふむ事ふ心おちゐ衍バ歌よまゞいそぎり〳〵潮來の河岸
ふ船をつゝぬ云歌あぬさあもゞ云あぎて其余ハ畧も一首づゝを

潮來　鹿嶋志云鹿嶋ゝりハ西二里行方郡ふて滿肆有ていと繁
昌ふる地ふり潮來の字もとハ板來と書さるを西山の君鹿嶋
ふ潮宮ありて常陸の方言ふ潮をいさといへる興あることく
おゞしてかく書改られさりとゝ和名抄ふ行方郡板來風土記
ふ從是往南十里板來村近臨海濱安置驛家此謂板來之驛云ま
さ淨見原天皇の御世建借間命をして凶賊どもを擊亡さるゝ
所ふ種屬一時焚滅此時痛殺所言今謂伊多久之郷云
潮來圖志云常陸ふる潮來の里ハ東都五町街ふふらひ廓ふ
ゝり朝夕の出船入ふ衍落込客のぜんせいハ花のにゝた雪のも
ふ至十六嶋々ハいふもさらふり香取かゝ波息栖てうゝみ浦
々までも一まうふうゝみ富士筑波の両峯ハ西南ふつらふり
数十里てゝまうの影境ふり近き頃まで銚子口より親船むき
もそゝ入津せゝ處也諸矣の藏屋敷建つゞきゝゝ淵瀬うゝ
うて船もいらゝ唯仙臺河岸のゝ存ぞまさ西の入口ふ潮浪里



いたこ潮来の圖



ゆ〜呼小坂ありうゝゐのさゝ引ける故ふ左ハ名つけゝなゝん爰
ゝ〜遊女町すゝ十餘町其間を淺間下ゝゝいや高き並木ゝり
いゑこのゝらゝ松とて沖衆船の目あての森ゝゝ春ハ梅藤の
名木四季ハあが花いとゝろゝ此處ゝり霞ゞゝら信田の浮嶋
手ふゆゝる如し

海雲山長勝禪寺　二町目ゝり入る馬場の両ゝい松の並木山門
ふ十六羅漢を安置ゝ佛殿ハ南向十間四面　右大將殿の建立
ゝり堂のゝさゝらふ卧龍松前ふ文治梅あり鐘名ふ
常陸國海雲山長勝禪寺鐘名有序
寺始於文治元年右大將殿時所立也追今元德庚午百二十余
載乃爲鎌倉殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未宏貴眷等
共施貲新而大之住持妙節長老請於圓覺清拙叟爲之銘曰
維古蘭若　長勝厥名　寸進微撞　令器未宏　爰命息氏
鎔範速成　鏗々訇々　殷雷吼鯨　音聞佛事　聞聲啓育
大哉圓通　十虛廓清　霜天月曉　落景初更　眞機普發
衆夢齊驚　深禪偃仰　苦趣休停　客船夜泊　常陸蘇城
上延睿筐　下息戈兵　檀門茂盛　梵刹堅貞　海雲日横
青山峥嶸　人天號令　相道通亨　元德庚午十月一日書
大工甲斐權守　助光
住持傳法沙門　妙節
大施主下總五郎禪門道曉
大檀那相模禪定門　崇鑑
斯ゝるゝゝゝり此鐘をゝゝりふ撞事をゝゝるさゝ又時の鐘ハ本坊
ゝ入口ふあり
小里姫の塚　同大衆院淡島明神の地内ふあり小里姫ハ島崎左
衛門尉殿ゝ姫君ゝり今ふ小里とゝふ古跡の地名ゝり

潮來竹枝詞　　詩佛老人

思似月明復水清隨郎行處逐郎行誠從十二橋頭望何水何橋
無月明

泊碧擱舍　　鵬齋老人

家々面水須秋色明月湧時流更輝漁唱一聲何處子潮來風起
竹枝辞

ちゝ浦のうてちゝあみやあゝむ窠さむさと山ふ千鳥のなき
みゝゝ聲　　魚買

鶴鴿や潮來をしゝて岩つゝひ　　蓼太

南郭文集ふ潮來詞二十首序五山堂詩話其外詩歌發句とも
諸書ふ散見する處擧て數へがたし畧之

松屋外集ふ神社を古曾といふ條ふ伊太祈曾ハ和名抄ふ紀伊國名草郡伊太杵曾神戸あり且來郷ハ前神戸須佐神戸ふ亦びるり且來をイタコと訓むハアシタコのアシハ約イなまびるり常陸鹿島ふ潮宮といふる小祠あり文行方郡板來郷也

今ハ潮來と書々りこハ朝來の誤ふらむと門人北條時鄰ゲ鹿島志ふいへり續日本記四の巻ふ紀伊國名草郡且來郷と有り

名物　花あやめ　川ゑび　鯉　むゝ鮒　鳩
扇島

いらんふ聲うけらゝ田植の日　　五達

潮來曲の唄

柳よやふぎよ直ふる風ぬぎいやふ風みるあびゝんせ
きこハ三夜の三日月さはよ霄ふちらりと見さぞゝう
ひしゝゲ心ゲ竹ふもいゝバヒつて見せさやさのむねを
さゑよかしゝ海ふ神あるふらびのたせたまへや今一度
いたこ出じゑの十二のそしを行つもどりつ出あん橋
戀ふこゞれてふゝせそよりもふゝぬ螢ゲ身をこゞん
いゝこ出島のすこもの中ふのやゑ咲とハつゑ出ぞ
戀のちひぶこ單ふひゝも祝ぞみとるまふ猫ほゝや
數あれども余ハもゝゝぬ

潮來の遊女何某ある時の吟

おもふ事積でいくづす炭火の

露しもやとろく寐らるぬ舟の中　霞水

俳家奇人談

潮來詞二十首并序南郭文集三編一　三才

甲子春遊鹿島舟下刀禰行聽欸乃聲調楚哀頗有情致問之則云潮來所歌潮來常南地名也既自鹿島歸舟歷其地就見臨江數百家多倡妓俗雜日夜相聚游戲蓋東控海西通都率多水漕之利魚盬之饒商旅所湊亦江東一都會也其謠大類異歌當讀樂府遺篇吳聲歌曲及西曲諸樂想見六朝謠俗之態其聲雖不知以今視之士風詞情蓋可知也又感劉禹錫聽竹枝之音乃雜擬江南諸樂苻此作此詞二十首因記舟行興寄聊自誓

不見東流水歸舟西曲流潮來風且逆有時不自由　可憐洲裏鳥兩々浮江水日見不識名

指顧問客子　門前猗獨樹鬱々掩江涯爲是苦心多春來不著花

雲氣南北曉日紅只形

一雨洗時春不須遠

駕毛毛雲實穩生長江

萬里風

曉渡乃稱川　水雲老人球

園邊川　潮来の前れ川をいふ北利根川の分流ふて末ハ延方よ
り浪逆の浦ふ落つ此川の名ハむ〳〵いさこの大和屋太兵衛
抱の遊女ゝの朝夕びん水を流し〳〵る故をのべ川と云とあん
ふまづ川　北利根川の末ふあり是より浪逆浦へいづ

髭ゝどの芦戦ぎ〳〵り鯰川　貞翁

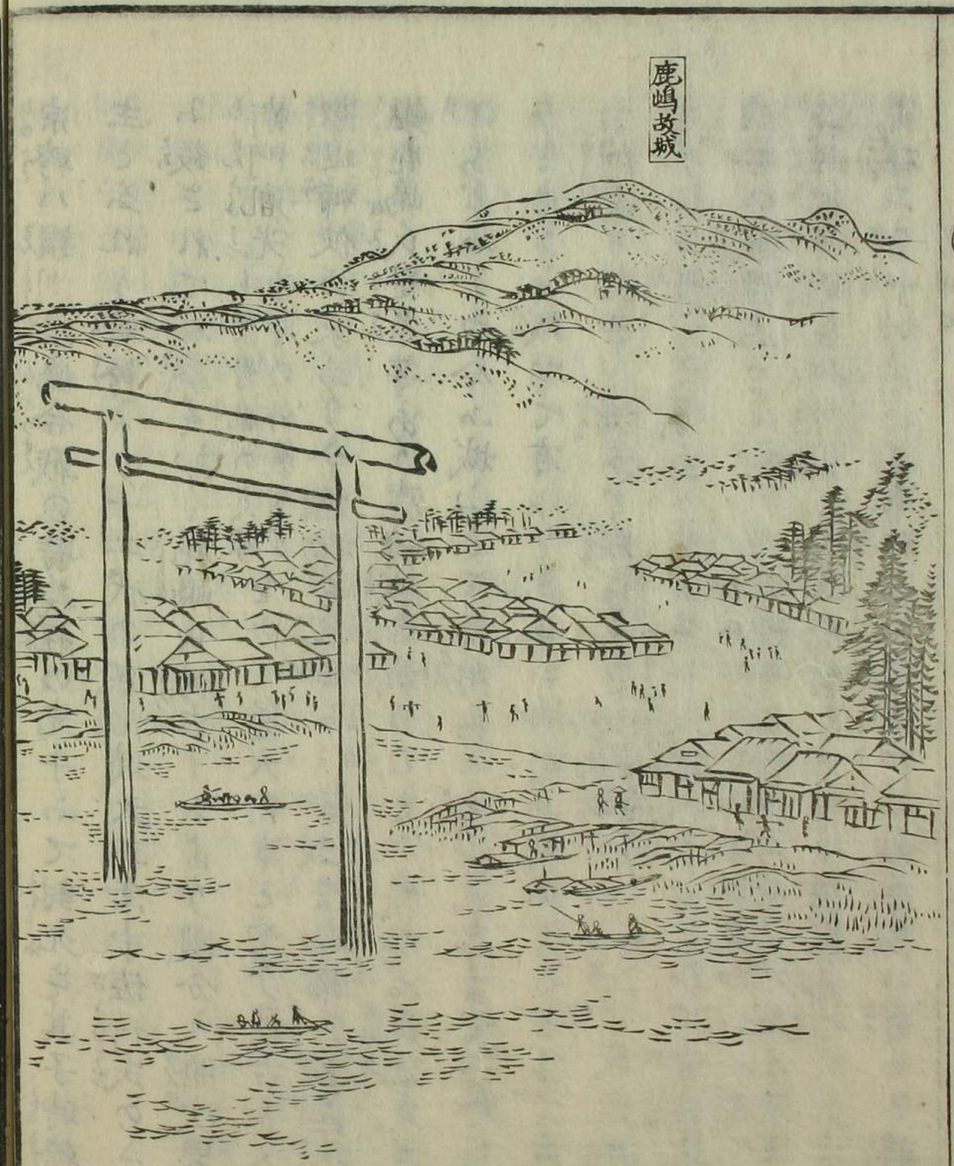
浪逆海　鹿嶋志云大船津の前より行方のめぐりをかけて云り
萬葉集ふ　常陸ふるなさゝれ海の玉藻こそひけぞさえそれ
あどゝ絶せん仙覚抄ふ常陸の鹿嶋の崎と下總の海上とのあ
いひゝり遠く入こる海あり末ハ二流ふり風土記ふハ出をを
流海とかけり今の人ハ内の海とあん申そその海一流ゝ北の
〳〵鹿嶋郡南の〳〵行方郡との中ふ入ゝり一流ハ北の〳〵
行方郡と下総國の堺をつゝ信田郡茨城郡をぞいれり然るふ
うれ内の海塩れこつる時ふハ波ことふさゝのゝるゝゝれば

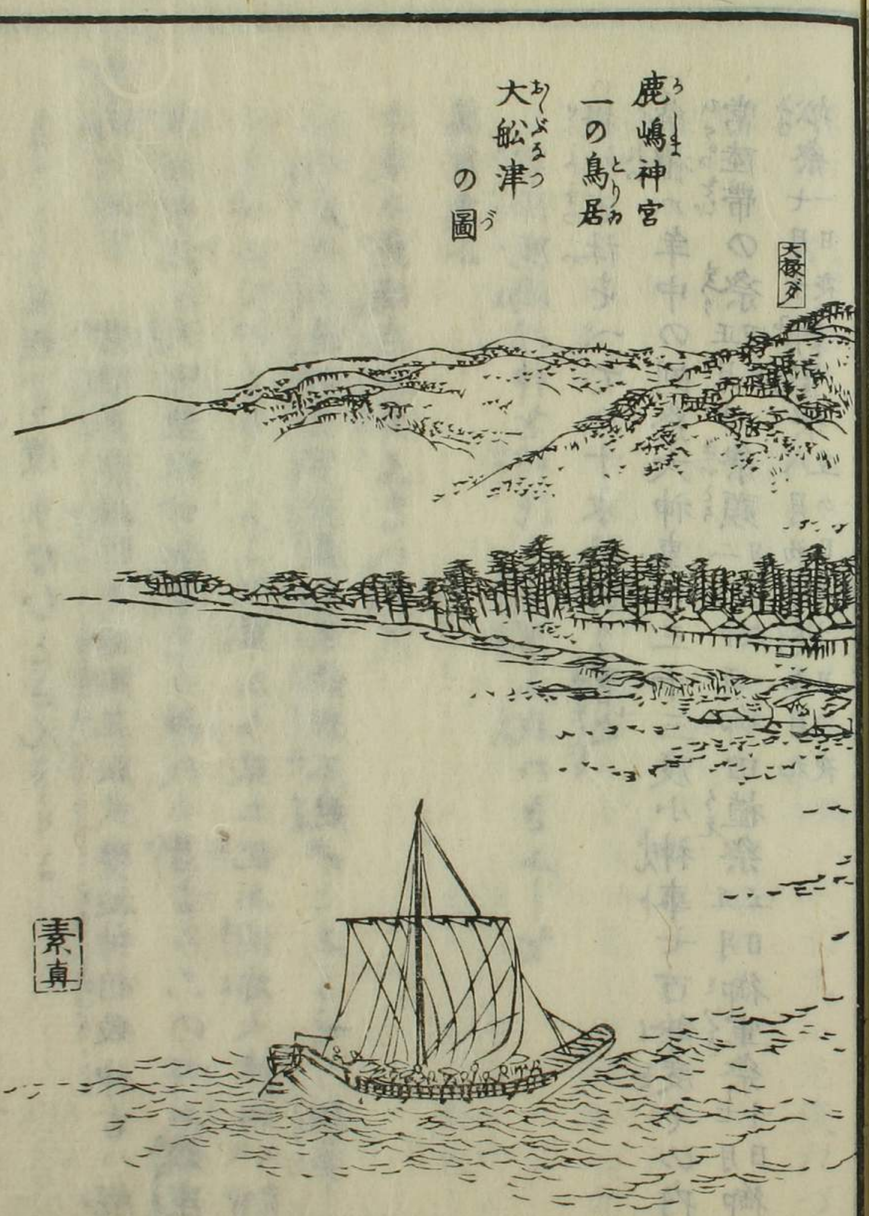
浪のさゝのぼる義ふゝりて浪逆海といふべきゝりゝり云云風
土記ふ香嶋郡ハ西流海まこ行方郡東南并流海云云
安永鹿嶋道の記ふ今日もまこ船路をくまづ漕出をバ潮来昨日
ふハ似ぞ廣き堀江の芦間をくゝどもとをく一真ありゝりい
つしゝ岸〳〵遥ふ漕出れば入海とやらんいへど蒼海うだ
りたゝれそうゝるゝれとの山も礒ともゝど遠々をどゝふハ
浪風ゝぎとこゝりていと静ゝれば取楫をるく心をさきし十あ
まりれ嶋ぐゝふかきゝるとも及ゝく見を息栖ハゝるゝふ沖
のゝさし出さるいふもさらゝり
立ぢく松の洲さゝふそれとまついそでもゝるゝ見をる
神垣ゝの御社ふも昨日詣むとの武藏の國府ふていそれあら
まーゝりしゝ此頃の風ふて船路追手ふらゝ打やゝぬ今日を
よくゝきて船路も静ゝゝバ船よせむと船子どもいへど兼

てそれまうけゐら祈ばにたうけとりまうふひい出ゞさく行
過ぬゐどゐく大船津ゐ差ぬ此きしかさ十八丁ぞうり放をて
海中ゐ鳥居をてうといふ今建暦の時ありとて見えゞ云
大船津　鹿嶋の神社一の鳥居海中ゐたてり鹿嶋日記ゐ舟津と
いふを大安寺社私財帳ゐ津國西成郡船津とみえ平家物語有
王嶋くゞりけ段ゐ彼嶋へとさる船津ともゐりて船をく呼ゐ
いふ名ゐりうり云さきも神の津ゐれゞむうしゐ津の宮とい
ひしよ風土記ゐ見ゐ是をうう神宮へ十八丁
ま大船戸と見ゐ東國戦記鹿島合戦の條ゐ文畧江戸崎
の城主土岐伊豫守五千余騎を引卒し大船二百艘ゐ打乗り順
風ゐ帆をあげかしゐをきして押寄るとの事ゐしまへ聞へけ
きばかしゐの揀梁平自官友治大ゐどろき合戦の手分を定
めんとまづ塚原の城ゐ塚原若狭を大将として五百余騎林
の城ゐ林左京大夫を大将として五百余騎鹿嶋の宮の前ゐ扣ゐる土岐
を大将として五百余騎神領ゐ大宮司
伊豫守大船戸ゐ船を漕寄て敵の様子を聞せける云云

鹿嶋の故城　鹿島志ゐ鹿島三郎政轉の子六郎宗轉始て築處也

宗轉ハ讃州屋嶋合戦の時義經の先手ゐて討死ゐ其子時轉城
主とゐれり時轉より十二代の孫治時天正年中佐竹氏のさめ
ゐ殺されて城廃をかゝ鹿嶋氏滅亡しゐゐり國分大膳次男左
衛門胤光千葉常胤の支系を立て惣大行事とせり是古しへの
惣追補使の家ゐり今猶存ゐ委曲ゐい常陸國誌源平盛衰記東
鑑鹿嶋氏世系等あり鹿嶋城合戦のことい鹿嶋治乱記東國戦
記ゐどゐこゐ今ゐ城山とて其跡あり慶安五年までハから堀
ゐどあまさ残ゐて有しを桑平の御世ゐ用ゐきことをて大宮
司則廣うけうゝ堀ゐど埋らゐき新坂新町ゐと云ハ此時開けしゐり　又大船津
より北ゐ當りて峯あり里人是を大椽べさといひて常陸大椽
國香の城跡ゐりといゝり北條九代記北條相模守義ゐ從て鼻山討手ゐ行条ゐ潮田鹿嶋小栗並方
義經記評判義經都落の条ゐ片岡こそ常陸國鹿島行方といふ
荒磯ゐそせいゝさるものゐを信太の三郎浮島の有々る時も


鹿嶋故城


鹿嶋神宮
一の鳥居
大船津
の圖
大稜ダ
素真

常ふやきて遊びくるふ源平の乱出來候ハヾ葦の葉を舟ふー
ゑりとも異朝ハも渡りなむとさんドくる

鹿嶋大神宮　常陸國鹿嶋郡鹿嶋郷正殿武甕槌神相殿神右ハ經
津主命左ハ天兒屋根命を祭り神代の昔よりハの所ふ鎮座
ー大神ふていともくくふる紀事あり風土記ふ淡海大津朝天智天皇
ふ初遣使人造神之宮自爾已來修理不絶云と志るせり猶委ー
き支ら鹿嶋志ふ詳ふ畧ハ

萬葉集ふ
霰降鹿嶋ハ神を祈ひ皇軍ふ我ハいきふーを

○摂社末社そべて八十末社あり畧之
○祭禮ハ年中の例祭大神事百三十三度小神事七百餘度その内
常陸帶の祭正月十四日　祭頭二月十五日昼夜　御田植祭五月五日　御軍祭七月十日　御
舩祭七月十一日夜　新嘗祭八月初丑の日　相撲九月九日の夜

○名所　要石地上ふ出さる所二尺許石頭ふ夫木集ふ光俊たづ
ふうねらふをつる哉千早振を山のおくれ石のみまゝを
御笠山神宮のめぐりの山をいふ松杉の古木れ中ふ生じいとおふし　御手洗川二丁ばかり山の奥ふ有
高間の原東一里斗り海辺ふあり　末無川同所　碁石濱同所　鹿島浦東大洋海　角折
濱三里斗北ふあり　甕山　神の池三里斗南ふあり　浪逆海大舟津の前
○御物忌身潔齋して神ふ仕へ奉るれ祢ふあり物忌ハ神官の内よ
幼女のいまだ經水を見ざるもの亀トをもてあらミ
其職とさだむと云
○大宮司　神宮寺の支鹿嶋志ふ詳ふあり
○神寶　古文書等畧そ
○七不思儀　要石　御手洗の水　末無川　御藤
海の音　根あゞ松　松ゝ箸
○七井戸　染井　成井　華柄井　清水井　保太井
寸府井　波左間井

○名物 洲濱の菓子 俚俗デンチユウといふ

弥勒謡 土俗のならひに物の祝ひなどあるをり又は祈事ある日などすべて時節にふれつゝ老婆等おほく集て弥勒謡とて各声をあげて歌うたひ大鼓をうちて踊まわり手を振つゝ踊る貌いと可咲く中昔の風とこそきこえされ其謡にいはく「よのなかはまんごまつだいみろくのふねがつゞいさァともへにはいせとかすがなかはかしまのおやしろありがたやいきすおもりはこがねのしやだんうてかゞやくうしろにはきよきみさきまへはめがみをとこがめござふねかとりはしどふおやしろおとにききくもたふとやひとたびはまゐりまうしてかねのさかふまかうよねさごおよひござらぬよねのさがふまうよなふこともかなへぬへひたちかしまのうみぐ」又雲萍雑志にも鹿嶋踊の謡見ゆ此外くさぐの謡あり

經石 御笠山のうちに埋る所ありて五六間許のあひだ小石に經文を書るがあまたあり親鸞上人の筆也といひ傳されど總常日記に濱臣に近き頃わが友狩谷望之がものにまうでしをりほり出せる銅牌一枚を見しが秀尊といへる法師の書て埋めたるにて親鸞上人のにはあらぬよしとしるし

表

鹿嶋太神宮寺
奉納妙法蓮華經一字一石書寫 一百三十七部
嘉吉三年癸亥二月二十二日 大願主秀尊 白敬

長九寸一分
幅上三寸三分 下一寸六分強
厚一分弱

裏

翁篝 慈父祐尊 慈母有阿弥
醫山 良貞 道祐
道永 德賢 妙意
次郎三郎

嘉吉後花園帝年号拒文化十二年三百七十三年

今そのやしろにをさめありと云

鹿島
神宮の圖

享保道の記仙臺吉村君　それより輿ふのりてゆく浪打際まで大船大宮司同神司東主膳出あひてゝ主膳ハあちひき所の古跡ゝどかゝりきゝに威徳院観照院寶照院地福院ゝどいふ真言宗の寺あり大船津の濱家數千斗ありといふ此里をえぬきて山のかさゝ石ゝてゝけさる小橋ゝりこれ鹿嶋明神の御神領ゝ地ゝり古のところを藤原郷といふ大織冠鎌足公ゝ御誕生の地ゝるゝへゝくいへり則社もゝりといふいにしへゝ大織冠ハ大和國高市郡の人と元亨釋書ゝハ見えさり此遠國ゝて生れ給ひしと云こと怪きゝ詞林採葉抄ゝ鹿嶋明神ゝ参詣しゝふといふ事見へさりそれさへいちぢるしからぬさやうの事ゝりゝひ出して後人のにさへなるゝや鎌足公ゝもちたまへゝ鎌も此社ゝあるよゝをかさる猶信ドがたゝ近衛殿御家ゝにさゝりゝるゝ古そ聞ゝをまさ鎌倉ゝ

かの鎌を埋そゝふといふ説もありゝるゝこれさ數あるべきもゝとも怪ゝへゝ此ゝ本説ゝ〻む瑞甕山根本禪寺といふ寺あり門の額ハ東海禪窟とあり筆ハ若らざれどもゝるゝゝへゝりて見ゝ本尊ハ藥師如來推古天皇の勅筆ゝて佛殿ゝ祈禱とあそびされゝる額ありゝのまくぐりゝ御甕とて齋の家ゝ今ゝ傳甕ありといふ藤原光俊の鹿島を見れバ玉ざれゝ小ゝめ斗ぞまさのこりをるとよを為ゝ此ゝめの事とぞ云云まさ安永道の記徹山君ゝむゝ此道を祖父君のゝぐらせゝゝ道の記ゝくゝしゝれバゝ彼主膳ゝ宿ゝ至りて浴を清め衣服ゝどとりゝぐのへてまうでぬまづ跡の宮ゝまいる夫よりて御齋ゝまいる女四五人ゝゝびぬさる中ゝおとなひ老る女立出て御酒をゝめまさ御齋のりをくらるゝ和歌二くさもてく主膳ゝさいらゝ居て通りせよと聞ゆれども神盧のお

それもあるべとみふいらへせん事のそどうふうく帰國
れ後ふこそ申べきよーなてまうてぬ御齋の歌二くさ有る
わふみ守護のころみちれくの大守鹿嶋の社へ
立より給ふかーこさふ神盧れ程をおーえうら
い祝の余りふ言の葉をはーりふてまつる

鹿嶋祭主御齋光子

うれーやと神もおもわむ今日いまさまれふる人のあふく
まごとを

又寄國祝をまみ侍る

かーこーれ猶ゆくさふもるびくらーおさまる國れ御代の
民くさ

とのりれば日を經て返ーとて申遣ーるる

鹿嶋の御社ふ詣る日御齋光子れもとうう

をーやと神もおもいん今日ハまさまれふる人の
あふくまごととをとかいはけて送らもられえ
外ふまさ何うおもいんまをふきていのるまことを神ーう
けふべ

寄國祝といふ事をよみて送らもるる返ーとて

代々うけて治る國れ民くさもとでの露ふ猶ふびくらー
かくて十町あまりもはーむ木立はーく所を行て鹿嶋の御本
社ふ参詣をきーふまさる森の志ぎりたるが中ふときて杉
れ木高さ幾何とふく神さびたとれとうとさいをむうさふ
ー樓門ふハ大宮司何がーをはーめ神主あまさ出迎てあふい
も拜殿歌仙の間ふどいふきらめたとうぎふさうともとお
ぶも石の間より内陳ふ入るおがみ奉り公ーさくーれ祝きお
とまれべみてくらいてうせみきを進るふどいとぐさくーれ

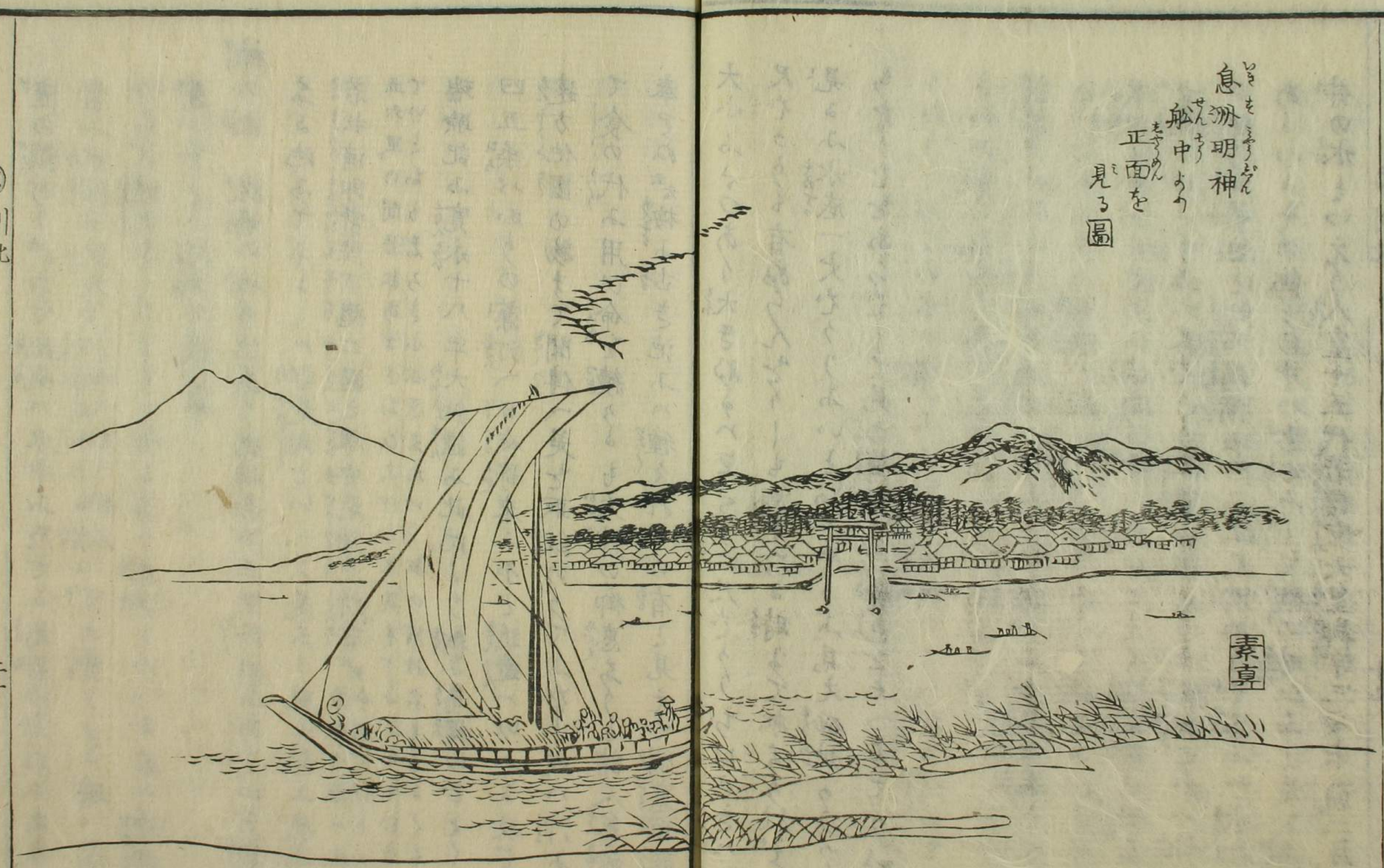
ちづまりて思ふくはなる〜是より七八丁歩より行て奥の宮ふ
参りまうでは〜髪ふて又旅粧ひして御手洗要石ふど行て見
る又もとの道立ゝへりて御本社残るうさふくおがみぬ數多
け霊寶をも拜をて後宮めぐりをれバふるゝ鎧あり御本社の
内ふ神木の杉まことふもぎゐ〜くいくとせゝ経さるもの歟
木高くつと〜ふゝの主膳こまやうふかさる二の鳥居を出
てあ〜石よせて猿田といふ驛のうさふ行日もたけて午のさ
ごりあれバ高天原三笠山ふどいふハ見ぞして汲上ふ昼飯し
て夜いさう更て夏海ふ差ぬ云云

息洲神社　息洲村の海邊ふあり　住吉三神底筒男中筒男表筒男
命を祭ゝり鹿嶋日記ふ處のさ伊駿河のくふれ三輪の社頭ふ
似さうといえり總常日記ふ汀三十間ばうりを以をて海中ふ
鳥居をてり鳥居のきは二三間はれをて神代よりれ瓶といふ

大小ふゝつあり大きぬるハ六〜六尺ばうりちひさきハ三
尺ばうりも有ぬらんをりしも潮干たる時ふて船よりれぞき
見るふ水底一丈ばうりふいとはざやうふ見え砂地ふうゝさ
ちなうををあらをして見ゆ薄黒きに黄色をそへてをりひゝ
りたりををての水ハ潮をゝくゝして此瓶のうへれる所のをぞ
さらふ潮のけるくあぢをひはをしくあゐ〜云云

諸國里人談ふ息栖明神のいそちゝ江海中ふ女瓶男瓶をてふ
さ川の奇石あり男瓶ハ経一丈あまりふりて銚子のかさち也
其口とおゞ〜き所ふ溝あり中ハ控のごとく窪て鍋の形ふり
女瓶ハ口さり五六尺ばうり土器ふ似さり土俗曰これハ神代
の銚子土器也と此石満潮ふハ二三尺沈めり干潟ふハ水上ふ
あ〜ハるその銚子の中ハ素水ふして潮の味ひふ〜是を忍塩
井の水といえり人皇十五代若櫻宮天皇御宇三癸未歳二月鎮

息洲明神
船中より
正面を
見る圖



座の額あり云々さて此瓶ハ水中ふたてる鳥居の左右ふありて常ふ水底ふ沈たりとい干浮る水上ハ出る空の曇りする時ハ見ヒうらぶ晴天をりハふくくもるあり息洲といへる名ハ沖洲の義ゥまくくハ浮洲の義ふや

神の池　鹿嶋の神の池あり鹿嶋志ふ三里許南ふありいと廣大ある池ふてふるくハ安是湖といへる是あり風土記ふ鹿嶋郡若松浦即常陸下總二國之堺安是湖之所有云云若松の浦ハ此邊今深芝村と云て五六里の間若松あまたおひたげり各其もげくふおもむき有ていとおもろき小松原ふれバ若松の浦れ名もしるくふん瑞験記ふ寛永十八年大飢饉ふ此池ふり細き鳥縄のごとく長四五桑バかりの藻汀へ日夜寄来るゥど近邊いいふふ及ぞぞ遠方他國の物まで聞傳へ是を取飯のうてふなし或ハ汁ふ煮て食の代ふ用ひ命を續くるも大神の御恵ありと諸人尊敬ー奉ァぬ云云桜ふ古き池ふハ種々ものの有と見えて閑寛瑣談ふ

結耽録を引て元文二丁巳年播州姫路の一邑ふ池あり廣さ數百歩ありーゲ或人の小兒其池ふ水浴て溺れ死ーけきバ水を涸して田とせんとて一村の人々合力て水を酌乾せーに池の底ふ白き綿あり土人ときを取て看るふ草綿ふ等ーけきバ紡ふ繰せ織木綿とそるふ結好ある着用とあもろ尤多く有ー故村中ふ用ひ餘りて他村へ賣出ーけるゥ色白く上品ふもバ他郷の人も價を惜まバ爭ひ求けるゥへ一村大ひふ利を得て德にきくりと侍

苅野橋　神の池のゐどりをきべて輕野といふ風土記見も萬葉集ふ鹿嶋郡苅野橋別大伴郷とことかきーたる長歌ふ輕野より舟出して下總海上をさーて渡るゥを讀てさきバそれ遣りふありー橋ふりけん云云今ハ古の橋ふ

童子女松原　宮本水雲云風土記ふ輕野今神の池あり池也以南童子女

松原昔し神の男神の少女と云るがありて少女をば海上安是の少女といひ男をば那賀寒田の郎子ともいひしが何も美麗なる生れつきにて互に思ひ逢て遂に契りを結びしが人目を憚て二樹の松に化せし事をのこれ是今の常陸原也地に河さきを鹿嶋の攝社とて古く祭る手子后明神ハ神の少女を祭りしなるべし古ハ常陸原の地下總海上郡に屬せし由も風土記に見ゆ此乙女をも海上といひしなり安是の地名も風土記に出さり寒田ハ今三田といふ此邊皆いふしへ那阿郡の地にて神亀以前に鹿嶋郡といふなり也

手子崎明神　東下の羽崎村にあり鹿嶋志に旧記に神遊社と

もいへるよしをえてさハ大神の御女の神也といひ傳へさり

按に上つ代香嶋郡童女松原に則羽崎神の郎子神の孃子と云

ありてかさきにむつびさりしるが逐に松樹と化して奈美松

古津松といへる故事風土記に見ゆされば其の童女を祭る

社にハあらざるゝ孃子を手子といふハ女子を愛しをいへる

名にて万葉に菖蒲の真間の手児まさ埴科の石井の手児まさ

さらさらの手児にいやきあひにあどよめる手児もあるとして

手子崎ハ此さり海の出崎なれば手児の住さる由もてさハ

いへるなるべし云云

羽崎　東下の羽崎村なり此邊をべて羽崎舍利高野別所海老臺

本郷アラクさの七箇村を合せて東下といふさて此ところハ

鹿嶋の浦よりせゞきいと廣き砂山の木草もなく赤々と名さ

る砂地を經て古くに至るゝの光俊朝臣の家集に康元元年十

一月鹿嶋の社にまうでゝ彼嶋のさきにはうして見ゆ我國

は東のさてにあんなるゝの社より崎まで八七里とぞ申め

ると云りしハ古の羽崎のことにてぞなるべし

○是より川南

側高明神　香取郡大倉村山の頂ふかり古松繁りて神々しき森ふり香取第一の摂社ふりとぞ祭神ハ古〻へより秘て云ざりしとゝ鹿嶋日記ふ側高明神といふあり年ごとふ鬚撫の祭といふことありそハ酒宴の席を設て賢酒をくみかはしもし口ばあるとりの鬚ふでし者あるをもひて三杯のまをるならハしふりといへり云云

栗飯原氏城跡　分郷村ふあり今城山といふ土手堀の跡まさ大ある石櫃ふどあり小見川より西南三十丁ばかり有古の城も小見川とゝふへしふや常總軍記ふ小見川の城ふハ栗飯原左衛門小見川越前守と見えそ

木内大明神　木内村ふあり諸國圭齋録下總國の部ふ七石木内大明神香取郡木内郷木内伯耆同五石熊野権現香取郡府馬村

守井左門ふど見えそ

小見川　香取郡ふり内田奚の陳営ふり諸州採藥記云小見川内田何某領内ふ四季咲の櫻二ケ所ふ在り一本ハ八重ふて一本ハ一重ふと見也此さくら杭頭ドて今ハふしふり天正十八庚寅年近き年まさ植らもしとゝふり

領地拝領下總國香取郡小見川八千石松平監物家次

東源軍鑑三藤澤合戦の條ふ云小田天菴ノ旗下ナル小見河越前守輝賢ハ小櫻威ノ鎧ニ三牧甲ヲ着テ河原毛ノ馬ニ乗リ云云

爰ニ梶原美濃守景國ガ家子梶原平左衛門トイフ者心ニ思フ様彼六人ノ者ハ近付テ討タムヿ叶フベカラズ然レ𪜈彼等ハ武勇ニ高慢シテ動モスレバ諸軍勢ヨリ先ヘ進ミ出ツル匹夫ノ勇者トハコノ人々ナリ何トゾ一人モ二人モ射殺サムト思ヒ唯一人櫓ノ木ノ蔭ヨリ子ラヒヨリ既ニ二十間ニハスギザリケリ平左衛門矢頃ハヨシト悦ビ思フ様ニ引詰兵ト放ツ其

矢アヤマタズ小美河越前守カノドブエニ葛巻攻テ寸破ト立ツ急所ナレバ越前守馬ヨリドウト落タリケリ云云此六人ト云小見河ト

由良判官則繩戸崎大膳亮長俊行方まゝ附録ふい小田天菴氏
形部少輔貞久海上主馬五郎武經也
治公旗下ノ城々小美河ノ城主小美河越中守とゝ也

黒部川　同郡府馬志高稲荷入の村々より流れ出づ是を黒部川といふ黒部の橋あり此橋より下を九十九曲川といふ屈曲凡二里許を流れ小見川を経て利根川ふ入る

七本木　小見村の冨光山德聖寺庭中ふある銀杏の木をいふ此本周り二丈ばかりふもふ寄生六本ありそハ　樟　松　楓　南天　竹　ウシコロシ　是ふり銀杏と云もふ七本ばかり依て名ばくといふ

清水観音　清水村ふあり清水寺といふ十一面観音を安置せ世人筆を禁食して小兒の病を祈る参詣夥し

夕顔観世音　五郷内村樹林寺ふばかり霊験あらたなる観世音也門外ふ高き石坂あり此石坂を逆さふ向て這下ると云ふ小兒の病を除くといふ宿願ふよりて参詣もる人ハ皆さゝさふ這おりるふりたの寺もと寿林寺と書しふや常總軍記ふ此所ハ千葉の軍大將東六郎鎮胤が領地ふり六郎幼少の時よりたの寿林寺ふて手跡學文も習ひ師弟のよしを有る上地頭ふり菩提寺ふりいとうさならざる寺ふりしゝうバ今とても折々まゐりて他事ふく申かゝ也々ア云ふど見えゝり

四季咲の櫻　庭中ふあり周り五尺許石の玉垣をめぐらせ花一重ふりむゝし小見川ふ有し櫻の種ふりと或人いゝり

千丈が谷　本堂の後の山ふ至りて西北を望めバいと廣々さる耕地ありたの邊を一圓ふ千丈がやつといふ又千葉氏族の住しのゝりふもぶ千葉が谷とも云といゝり東六郎が城跡ハ

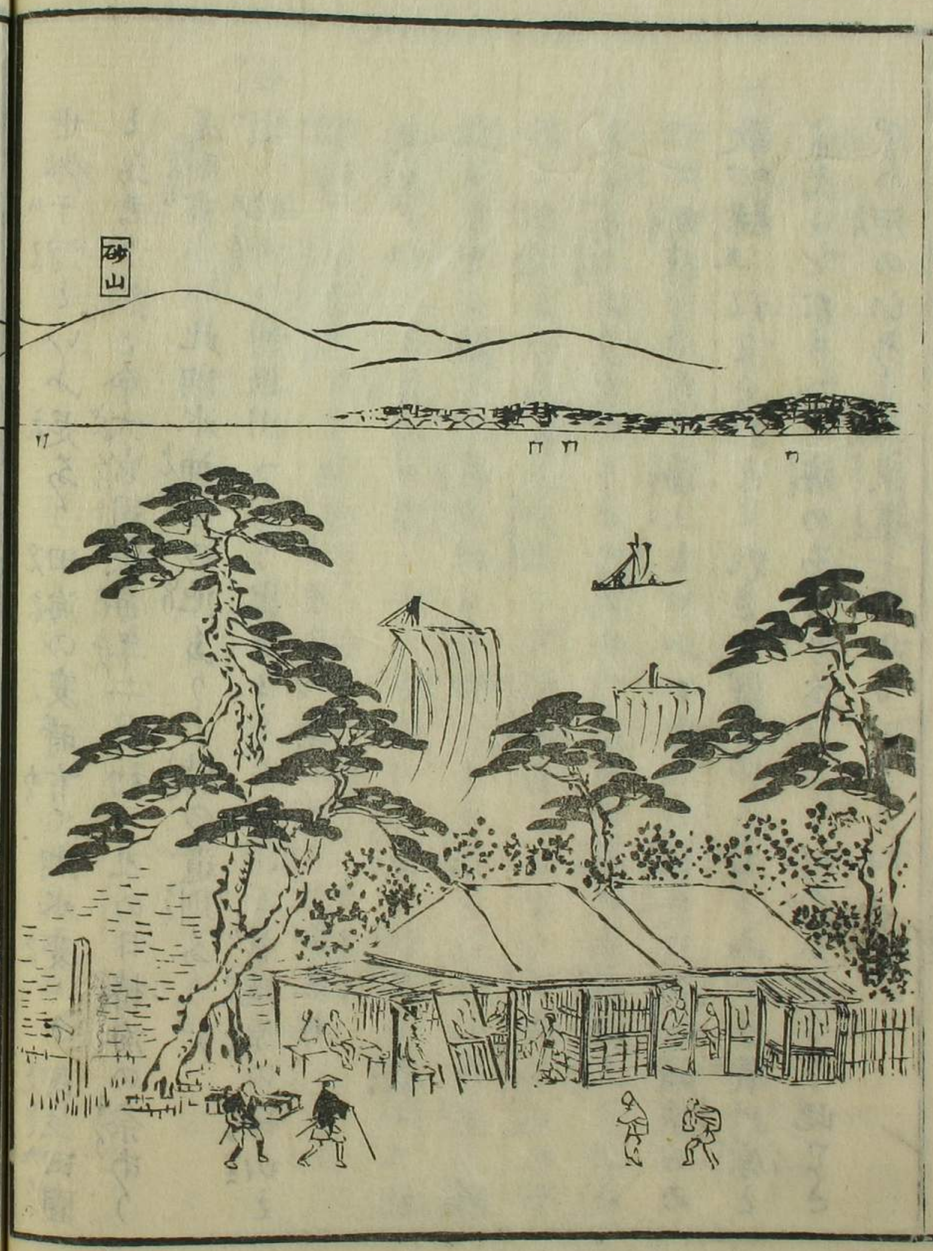
平山と云所ふて笹川臺ふ大門の跡あり
名物笹川蜆とて此邊石出今泉のあうり迫多く出づ

椿の海　今干潟八万石といふは是なり香取志云神宮を相距夏六里許香取迎瑳海上三郡の交ふ接も周迎十里餘此湖水今ハ消歇して田園とふもう古老傳て言大古此所ふ最大なゝ椿樹あり高さ數百丈枝葉三里の間ふ扶疎し華咲時ハ天紅ふして散時ハ地ふ錦を敷ゝと疑ハる吾大神ハ茂ふ影向しゆふ此木壽盡て根と共ふ自ら倒る根の跡湖水となる曰て是を椿の海といふ上枝の方を上總といひ下枝の方を下總といふ畧此湖水の傍ふ椿村と云るあり椿海ふ曰て然號せり又湖水なり迎瑳郡矢揷浦ふ到る夏三里許然るふ寛文中人有て官ふ達し大命を奉て地を堀湖水を矢揷の浦ふ流し水陸田數千町を獲ふ是斯人民移住て十八村となれり各共ふ椿新田某の村と稱ふ

世俗干潟といふ是なり田海の変時有て湖水変りて民星田園となるもう然と今大宮司家毎年二月初子丑の日椿海の祭あり是則古しへ此湖水神宮の池なりし時の遺則なり云云

石出　此所ハ利根川へなり出さるところふて常陸原の砂山と相對し風景至てよ佳し千葉の氏族石出日向守胤朝代々居城せし所なり

鹿嶋日記ふ云流れのまゝにくゞれば光俊の朝臣の霜ふゝれたるなどよ陸もし萩原ゝさとゝとる方よみやその東し隣なる日川といふ里ふ沙山として草木なゞもなく砂のみ立のゞもる高山あり右のうさい石もつふさの國ゝ香取海上のふさつの郡ゝなゞきたり海上といふい山上の憶良の臣の鎮懐石の歌万葉の巻五にとゝゝれそとれきつ深江のうなゝみの子員ゝ原とよゝるをたりへバ海のそとりうるゝ河のひろさ坂東道七里ふもはまりぬべし云云


砂山

石出より
常陸の
砂山を
見る場
湖城
春一
寫

岩井不動　岩井村ふあり二王門本堂鐘楼堂いとをごそろふり山の上より清水落る瀧口數ろ所有り四十八瀧堂の後の方ふ大瀧ありと云ろ病人死生の願此所ふ垢離して護摩をさく死病ハ物を忘るといふ

下間ふかヒろぬ闕伽の雫ろ那　蓼太

奥の院不動明王ハ春日の作といふ同岩屋二丁ぢろり通りぬけ瀧あり左右ふ三十三所の観音有り大師遊歴の地と云

猿田大権現　猿田村ふあり諸國圭齋録下總國神社部ふ三十石

猿田権現海上郡猿田郷　石毛伊織とも又新義真言部ふ十石

海上郡舟木郷　東光寺ふど見えろり

高田川對陣　常總軍記ふ云斯て常州國見の長臣栗林下總守義長ハ印西松兎臺より此處へ陣をろつし利根川を背ふあて高田川の岸ふ陣し惣勢合て五千餘騎旗さし物を風ふ靡し隧伍整々と備ろりまろと千葉方ふハ東六郎鎮胤を大將として三千餘騎次將ふハ二条大藏五百餘騎鳥居筑後五百餘騎村田兵衛五百餘騎千葉ゞ旗下のあつはり勢その勢都合六千餘騎高田川の端ふ押ろせ川を隔て矢軍ふ數日をおくりていまざ墓々しき軍ハろろりゝ了ろ愛ふ義長熟々と思ひろるハ千葉ハ主戦ふして目ふあまる大軍先手ぞふ六千餘ふり後陣おしはあバ二万をおぼべし我ハ客戦ふして味方ハ小勢ふり自余の如く軍せど千ふ一つも勝支あろハしまづ千葉方の大將共ハ不和とろるべき反間を行て同士軍させ其弊ふ乘て兵を出して勝支をろそべしと思ひおぢらく其術を工夫しろるゞきハと考へ出して腹心の家人を潛うふ壽林寺へ使ハし主人の病氣平愈の祈禱をたのゞ其御禮として貞宗の太刀一腰并ふ神馬一疋飼料として黄金十五牧を奉納せらもろる爰ふ千葉

の惣大将ゝ命ぜらるゝ東六郎ハ武運長久の祈をたのまんと
壽林寺ゝいゝ法印ゝ對面ゝ戦場の習ゝをバ再會ハ期しが
さゝとまづ酒宴をゝ〜りるゝ額殿ゝ仕ゝあき置さる馬を見つ
け立寄て是をゝるゝ黒のぬとき逞まゝき馬ゝ八寸ゝ餘
きる名馬ゝり六郎常ゝ馬を愛きる支ひとりさゝ〜ぬ男ゝれ
バ頻りゝ是をほゝ〜くゝり誠ゝむゝ宇治川を越ゝ摺墨もい
うでゝ是ゝ増るべき天晴の駿足ゝこの馬ゝ乗戦場ゝ出る
ゝらば海山も一飛ゝ〜ん願ハくハ此馬某ゝたびゝと頻ゝ
是を所望ゝれバ法印も出家の身故馬の入用ゝ去ゝ〜
他の人ゝらんゝハ奉納せゝ人の思ハくもゝあるゝ辞退もさべ
き哀ゝれど君ハ大檀那といひ殊ゝ國の守ゝり師弟の約もあ
きべ黙止がさゝ所望ゝ任せ進上せんと申されゝり六郎大ゝ
ゝろこび観音の寶前へ米五十俵を奉納ゝて馬を率てぞ帰り

ゝり義長ハ思ゝまゝ〜ゝ斗策ゝれりと心ゝゝそゝゝ
敵の陳中へ忍びをいき云ゝめゝゝハ此度壽林寺の吹挙ゝて
六郎殿ハ義長の味方とゝゝり近日高田川を打渡ゝ合戦ゝゝ
ゝゝ〜び裏切きべゝと浅瀬をも案内ゝそゝゝ契約せられ
れバ義長ゝ秘藏せゝ黒の名馬を六郎殿ゝ参らせゝり是ハ
乱軍の節六郎殿の目印ゝゝとゝゝゝゝゝゝ雑説をぞ申々
る此殿づけといゝむゝ足利の代ゝハ吉良今川を殿つけ
吉良絶る時ハ今川よりつぐべゝと御證文を下され惣下座ゝ
尊敬せゝとゝり又大閤秀吉公の御時ハ大和大納言秀長徳川
大納言家康公を殿付とせり御當代ゝいたりても御三家両御
殿の類殿つけ惣下座ゝりされバ其頃千葉の家ゝてハ此六郎
を殿つけゝよ二条大藏鳥居村田是を聞き大ゝあやゝしを疑ひ
ゝゝされバ六郎殿逆心ありとて評定ゝ〜二条下知ゝて六郎
を招き饗應の帰り路岸山といふ難所ゝ伏兵を置鉄炮を以て
討取べゝとたゝりゝゝども六郎是をさとり道を替て戻りゝ

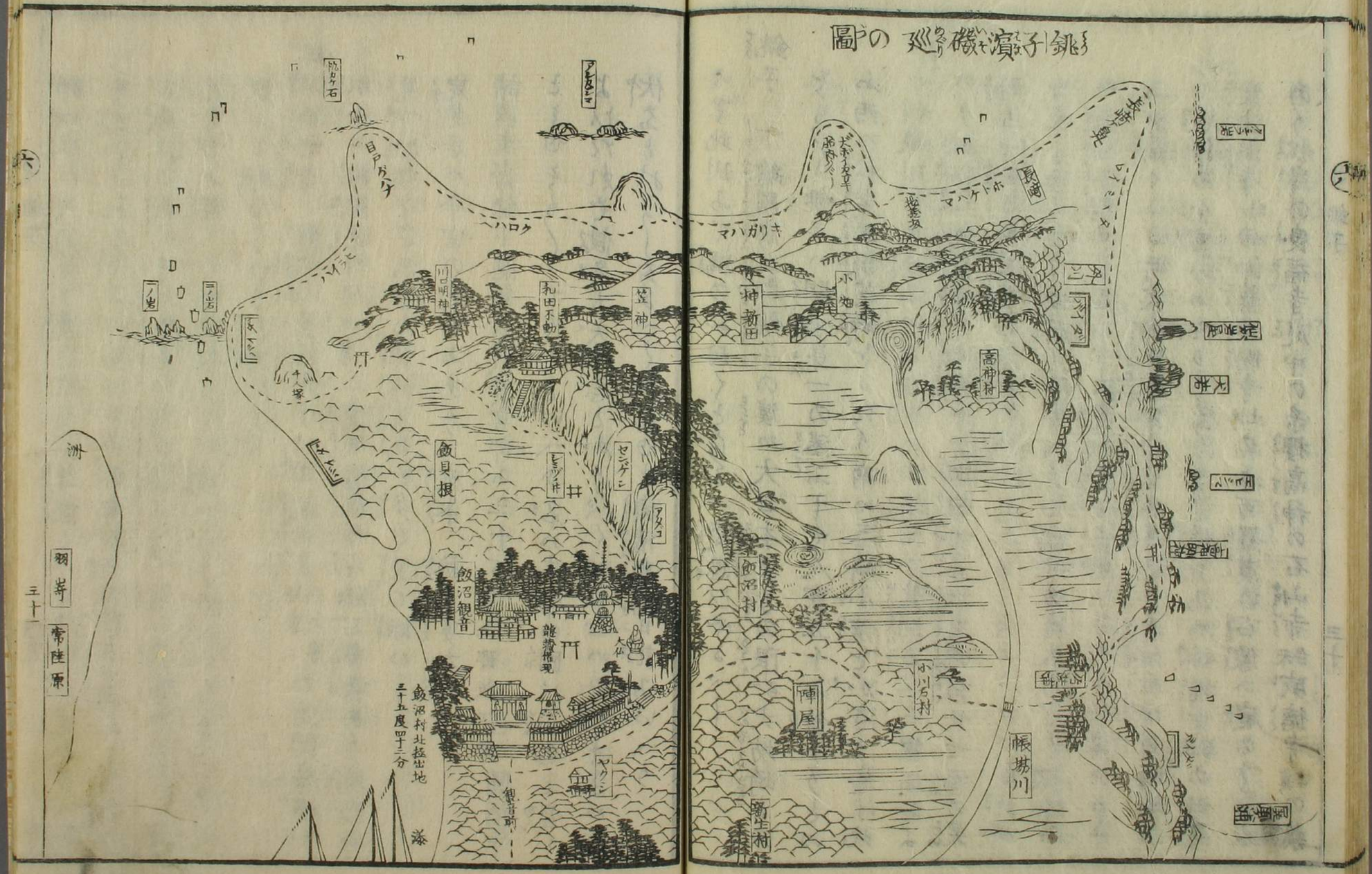
ろばむふーく是も止さうろう斯て東六郎ハ大ふいかり二条
ゞ伏兵ふ既ふ命もあやうう〳〵ゞ此度ハやく〳〵も悟りうゞ其
場をのがれきぐふ陳所へ押うけて大蔵を討ん度安〳〵といひ
ども内乱をおそれ扣さるふ今大蔵二条へ帰りさる上ハ何の
おそる〻處かあらんと逞兵百五十餘騎をゝさゞひ二条ゞ館
へ押寄我こそハ東六郎鎮胤ゞ岸山の謝禮ふ推参せり首を
渡せべーと云もあへぎ真一文字ふ切ろ〳〵る大蔵ゆ六郎と聞
〻ろゞ今ハのがゝぬ處と思へそせ出て戰ひ〻ゞ河ろい六郎
ふ及ぶべき絵ふ切たをきゝるを六郎ろ郎等堤大助そせ寄
て首を取〻ろゞたちまち舘ふ火をかけ一遍の煙とそゞろゝ
ろり東六郎鎮胤より七代の祖東下野守常縁ハ千葉常胤卿の
宗族御先祖の御分郡とゝて東郷を次ゐいりろるふよろ
千葉下野守を改て初て東の下野守とそ号〻ろるゝの下野守
ハ歌人ゞり今地下ふ歌道の傳ハる度此人より始る東野州と
いふハ是〻此高弟を種玉菴宗祇といふ宗祇の傳を三条殿へ
ゝ遺〻ろ遺院稱名院三光院其御子を圓智院公國といふそめ

御子を三條大納言實條といふ公國の高弟を細川玄旨法印と
いふ古今の傳受を丹後たゞべの城ふてうへ〻奉り〻度その
頃の書ふくハ〻此下野守ハ此度ゝとゝく佐倉へ聞へ〻ろ
東六郎より七世の祖ゞろり
ゞ千葉勝胤家臣ふ命じて次弟を正〻一老臣原式部ゞ父胤總
入道了月大須賀ふ隠居〻て在ろるを招ぎるせ評定ふ及ゝれ
ゞ了月ゞ曰二条大蔵ハ敵の斗策ふおちいり我罪おのれとせ
むるゝ処也六郎殿ふハ一点の不忠ふ〻猶又此度高田川の夜
軍ふ鳥居村田荒海の三将打死せ〻由聞及べり又義長今度兵
を出せ度全く千葉を亡ぼせべきふ〻もあ〻ゞ唯武威を志め
ゝの一通りゞらん此度ハ御和睦有て然るべーと則神大寺和
尚を頼を小見川越前守ハむ〻ー天菴の旗下ふて相知れる中
ゞきゞ小見川を差添義長の陳へ遣〻ろもゞ義長も尤と約〻
もふハち勝胤の姫君十三戈ゞるを囮見傳喜ゞ三男谷田部の
囮見主殿どの〻妻と約〻傳喜どの〻末の御娘を御舎弟大須

賀四郎胤信の妻と約せしめ両家そもそもふく人質を取かえし
ぢくかふく御和睦とぐのへあれば双方陳をぞ引取り彩取意本文
海上八幡宮　芝崎村ハあり諸國圭齋録下總國神社部ハ三十石
八幡　海上郡芝崎郷松本長門とゝも例祭六月十五日出輿あり
右三座ありそハ海上八幡と松岸の宇賀大権現と本所の妙見
宮ありて右三座の御輿一箇年ハ垣根村御假殿まで一箇年ハ銚
子長崎の濱墨石の上まで是隔年ありて
世人此邊よりもべて銚子と稱ふ
松岸　銚子往来の旅人此河岸より揚る淫肆有ていと繁昌ある
地ありて是より長塚本城松本今宮荒野新生ふとを經て飯沼の
観世音ハいとゝ遠　此間一里　總常日記ハ松岸といふハ船をてとりち
とより飯沼かけて岸ハのぞめる家居ども見ひさもハ時しら
ぬ雪のふりたるとゝちもそるハ皆蠣の目もてふるるあり

なほ此川ハて蠣のおなくとらるゝ支思ひやるべし
銚子　下總國海上郡銚子の渓ハ大日本東方の限一名犬坊崎と云
そもそも銚子ハ関東第一の渓ハして人家五千ハ餘もりといい
ハ西ハ松岸垣根芝崎をとる北ハ南ハ三崎小濱をかぎりとし北
ハ利根川の末渓ハいとり東ハ大海ありて其間方二三里ハおよ
べり飯沼山圓福寺ハ本尊十一面観世音坂東順禮廿七番の霊
場ありて松平右京亮の陳屋ハ南の方ハあり東のうらハ飯貝根
をえしめとして長崎より外河まで猟船の出入しげく濱邊ハ
ハ魚油干鰯のこざおきハ老少男女昼夜をとろとそ渓のうら
ハハ整々とる町家新生荒野今宮松本あり本城松岸の両町ハ
ハ遊樓の全盛いハぞりとるゝ佛院ハハ妙福寺法華の妙見
堂法満寺一の伽藍浄國寺土浄の五百羅漢の石像ハ庭のうらハ
あり松岸の良福寺庭中の糸櫻高神の石山寺天台威徳寺真言の藥

銚子濱磯巡の圖


ハロタ
マハガリキ
マハケトボ
ハイラヒ
目戸ガケ
ヒノ岩
ニノ岩
三ノ岩
川口明神
和田不動
笠神
神新田
小畑
高神村
飯貝根
ヒミツボ井
センケン
飯沼観音
飯沼村
小川ち村
陣屋
帳場川
千人塚
大仏
飯沼村北極出地
三十五度四十三分
観音堂
洲
羽海
常陸原
海

師如来ハ天竺より渡らせゝふ尊像といえはさふ東の方へふり出さる山の上ふハ和田の不動堂石階の左右ふ瀧あり古の山ふ登れハ後の方ハ蒼松の黛色濃ふして前ハ東海ふのぞミ奇岩左右ふ聳へて風色斜ふしゝて濱めくりの人々もまづこゝふ憩ふて時をうつされ勝地なり

飯沼観世音　飯沼山圓福寺十一面観世音坂東二十七番　二王門鐘楼石垣本堂の額圓通殿得水書　二重塔龍藏権現銅石華表あり境内ふ見世物輕ゝざゝなる其外茶見世多く至て賑ハし

定芝居ハ今宮の芝町ふあり　座本　梅本妻太夫

諸國圭齋録下總國新義真言部ふ三十石　海上郡飯沼郷　圓福寺

とゝもそも〳〵てゝ〳〵といへる名ハ志摩の國ゝ荅志と音かよひたれど假名も天不志とかくべく詞の心ハ出伏まゝハ遠伏ふとゝよ〳〵ゝるべくおぼゆと與清鹿嶋日記ふいへり

寛齋遺藁四　遊銚子感事而作二首

風波千里幾辛艱孤負春光忽自還何計平生如意筆却教今日恨空閑

東海之東渺々波飛帆礙眼亦無多春雲底事癡頑甚不使我爲觀日歌

去の外五山堂詩話ふ種々の書ふ詩歌等多く見られと略そ

名物　千リメン白魚　鰹の塩辛　鱸　牡蠣

防風　松露　丼の醤油　廣屋ふし　吉野屋料理

海藻蒟蒻人飯沼ふんふやくといふ味噌汁ふ煮て産婦あとそらの藥と云

観音より西の通ハ観音前荒生中町田町荒野橋本町竹町通町。

袋町明神町萬町芝町富田屋町通石町今宮目出度町今宮芝町。

唐子町夫より大込松本城長塚松岸ふ達さ

まゝ観音より東の方を飯貝根といふそハ芝町入町濱町濱宿田中町五藩町和田

町。清水町。橋本町。通町。田場町。植松町。東中町。東下町。西中町。西下町。市左衛門町。本町。竹町。是あり

清水の井　飯貝根清水町ふあり方二間をうり石ふてかこゝさる井也。銚子弟一の清き水ふり水汲人終日群集ふゝ

和田不動堂　和田の南山の上ふあり石坂の左右ふ瀧あり風景至てよろし

川口明神　川口の方へさし出さる山の上ふあり拜殿ふ白紙大明神の額うゝまり是より川口を眼下ふ見おろし常陸原より鹿嶋の浦奥州の浦々迄も見渡きる鹿嶋日記ふえもいはぬ磯べのさま岩はたゞぞまひよせうへる浪とりあつめさるあハれさ言ぞふもふんでふもたくしがさめどがいふ帆うは島三一嶋ふどいづれもめづらしきふ目ひらうれぬれきのうへ東の海雲ゐふつゞれてそれたゞみをきらびれわれた海は沖ふ技えもみえふくにいうぞう浪の花ハ咲賢

云傳ふむうし四日市場村ふ長者あり其嫁を延命姫と云上富田屋町の形部と云もの妹ふて阿部清明を聟とし姫顔かさちに至て見ふくし清明是をたらへ長者の家を逃いで小濱村の海の端ふ草履をぬき捨身を投さる躰ふふし置同村西安寺ふ入て忍び隠る姫後を追りけ此所ふ来ろの草履を見て大ふなげき我もとゝもふと思ひ定め海へ飛入り底のみくぞと成ふさり斯て姫の尸川口ふ流れ来りしを所の者共引あけて墓と掛と を納め祭りし故ふ墓掛大明神といえりるをいはの頃ふろ白紙の字ふあやまれりと云此神もとより顔形のそふくきをうもふる故ふや世人髪の毛の色あしきまさはちゞもあどの人掛を奉うて祈誓もれバ験あり或い顔のできもれあざふと有人ハ紅粉おしろいを奉りて祈るふ神妙不思義の霊験あうとぞ又銚子濱長く不猟の支あをバ川口明神をいさ免のさめふ濱村西安寺ふ祭りある清明の神より幣を乞来りて川口明神へ奉をバ奇妙ふ大猟と成といえり

千人塚　川口ふ右りむうし猟師の海中ふ溺死しるを葬りし塚也と云石像の地蔵尊建り毎年七月銚子中の寺々其日くの定めありて此塚の上ふて施餓鬼あり何人の詠しふや

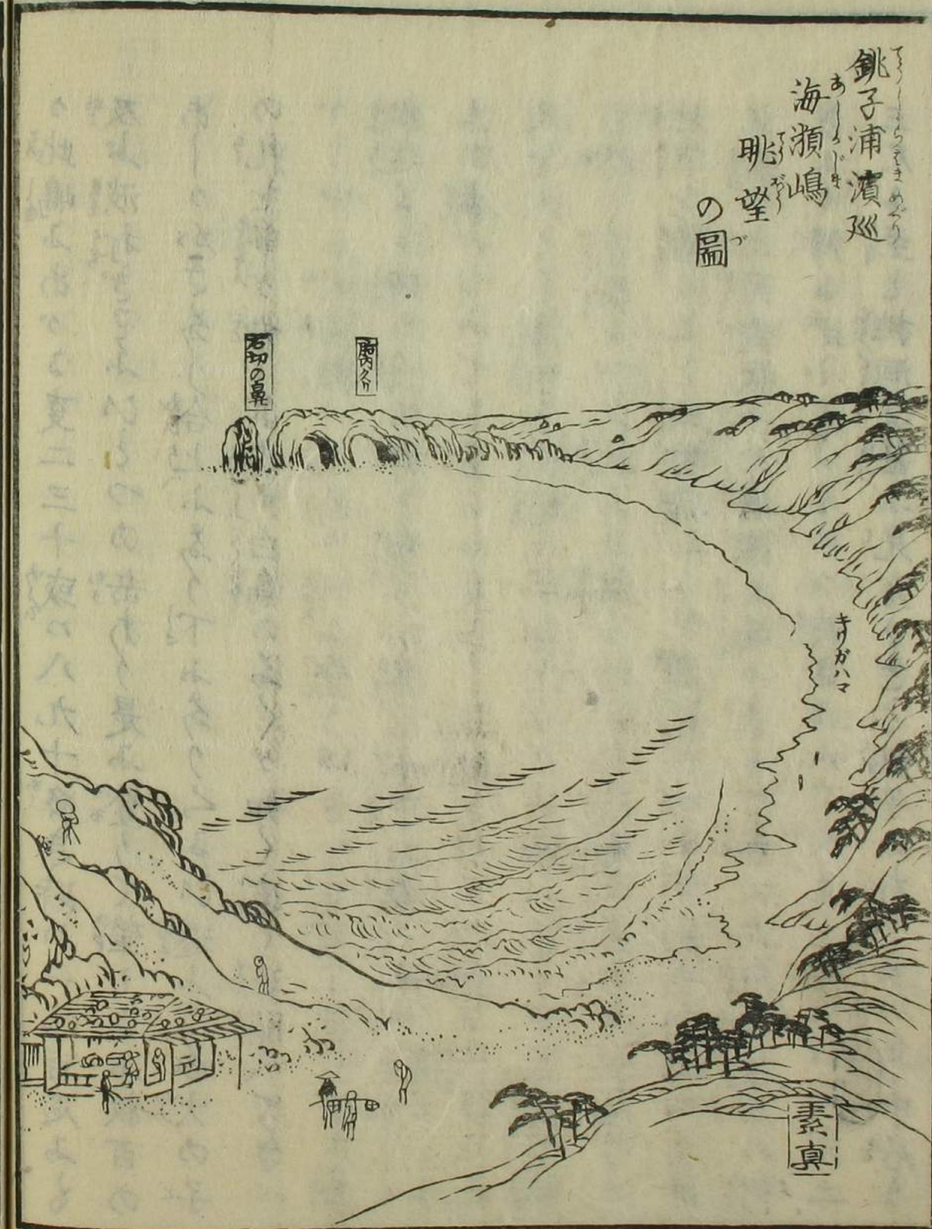
うさかさけたえしあハきいむうしふて今ふ泪ざのたゞもれ

ゆる塚まさ掛舩の風あしくして帰りおそき時ハ此塚のうへ

ふて火を焚川口の目印とする由ふて頂ふ火を焚し跡あり此
塚の側ふ鉄炮の臺場あり世人川口の御臺場と云
川口　則ハち銚子口ゟ岸ふ添て一の岩二の岩といふて大ふ
る岩二箇所あり其間凡五六十間許此岩より常陸の羽崎迄ハ
程遠けれど海浅くして船通せず依て此岩の間を出入も至て
難所ゟりといふ大荒浪の岩ふあたりて折くだけるさまいと
おそろし
是より南の方へ儀つぶきふ行を濱めぐりと云名所多し
目戸ゟ鼻　東海第一の出さきゟり川口より此所までを平磯と
いふ色々の名貝小石多し帆ろけ石ハ海中ふたてり七月廿六
日の夜銚子中の老若男女此所ふ出て月待も群集大方ゟゝび
葦鹿嶋　めどゟ鼻より此所までを黒ハへ濱といふ黒石多しあ
しろ嶋ハ岸より四五町許ふあれて小嶋ふゝつあり年中あし

ろ此嶋ふあがる支二三十或ハ八九十多き時ハ二三百疋ふも
及ぶ波打ぎわふひとつの岳あり是ふ登りて望るふ数百の
あしろかさゟり合上ふゟり下ふゟりくるひ遊ふさまふ大の子
の乳を爭ゟ如し其鳴声白鳥のゟくゟ如く遠く迫聞へてさハ
ゟし中ふ大海獺一疋高き所ふ登り四方を見廻し番をゟもて若
船近ゟる時ハ鳴て群を驚ゟし悉く水中ふ飛入る是を一の番といふ
出の番いつふても居らぬ支ゟし鳥銃を以て打捉る大さ八九
尺を大とす海中を行時ハ半身を水上ふゟらハし立て潮を飛
し行く甚畏るべき状ゟり按ふ紀州日高郡衣奈庄大引浦より
地方を離ること四町許ふして周圍百四十間餘の小嶋ふゟり毎
年秋の土用前後ふハ海獺此嶋ふ来りて春の土用前後ふハ何
も此ふ帰る云云小ゟるものハ長さ五六尺大ゟるものハ一丈二
三尺ふ至と桃洞遺筆ふ見えたれど銚子のあしろハ年中居り

銚子浦濱廻
海瀬嶋
眺望
の圖



海獺島を望遠鏡ふて見る圖

湖城老一宿

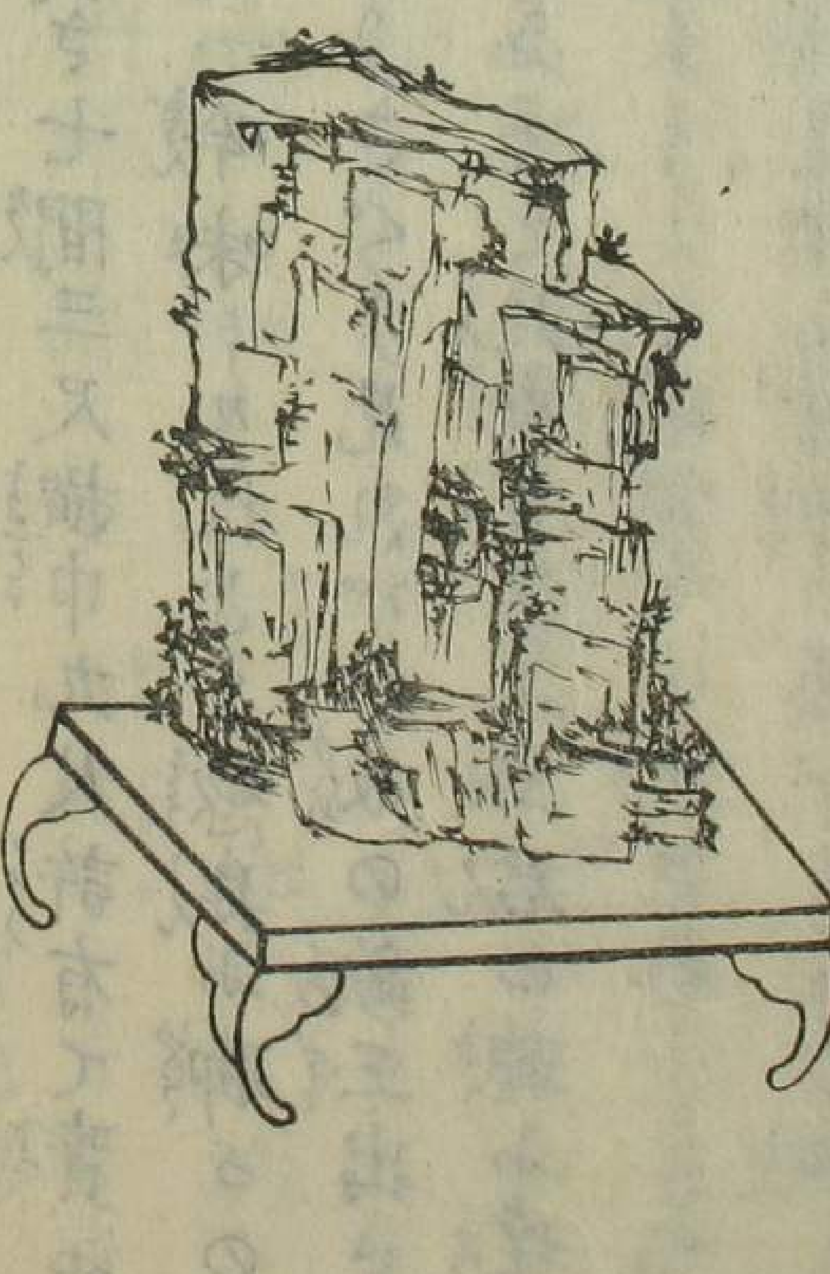
海獺の圖

大さもまゝ八九尺ニ過ぎざれど形狀ハ同じさまなり頭小く
口尖り歯牙大の歯牙ニ似たり目ハ大ニして耳至て小さく吻
鬚粗く長し全身短毛あり常の品ハ其毛茶褐色ありまゝ白色
黒白雜色蒼黒色も有り左右の扁鬢爪ありて末ニ岐あり尾ハ
獸尾の如くニして至て小さく尾を按て又両鬢あり是ニも
爪五ツ有りて末ハ分れて指の如し奥州津軽ニて此鬢をテツ
ピといふ又臘脯獸のヒレも鉄脛と名け皮ハ褥とスし或ハ馬
具ニ用ひ或ハ荷包ニ製す肉ハ剛くして味佳ならず本草ニ主
治を缺く東醫寶鑑ニ曰味鹹無毒主人食魚中毒魚骨傷人及喉
鯁不下者又時珍食物本草ニ曰味鹹甘平無毒食之消腫及瘻瘤
邪氣結核骨焼灰服治鼓脹腫滿まゝ脂ハ金瘡ニ傳て良云云一説
ニ海獺の大なるものを蝦夷ニてトヾといふ又紀州の阿志加
ハ海驢なるべしといえり三千とトヾとハ同物なり海獺と海

驢ハ同類ニして別物なり形ち海獺より大ニして體ハ瘦せ其
毛淡茶色ニして左右の鰭ハ海獺よりハ短しとれをもて異と
す此外ニ海豹攝虎臘脯獸その外海獺ニ類る海獸甚ダ多し云云
諺ニ鰡の大なるハトヾニなると世人ハよく云ふ支ふり先
年銚子の濱近き所ニてトヾの死しなるを拾ひし人あり是ハ
トヾ天上せんとして途中より落さるもの也と土人云あひら
其形尋常の鰡より大なれども別ニ帯る支なくたゞ鱗の間よ
り太き毛多く生出し頭より尾の方段々と毛長く尾ニ至てハ
長さ二三寸ニも至るとぞ此外ニも如此トヾを見るもの
折々ありといえり是もトヾといふものか
按るニ海獺の大なるをトヾと云といへば古の海獺も天上せ
るものと見えたり想山著聞奇集ニ文政豊後國佐伯侯の藩士間
其七郎右衛門と云て側用人ニて勝手方勤る人のよし砲術を好で江戸表火術の師家浅

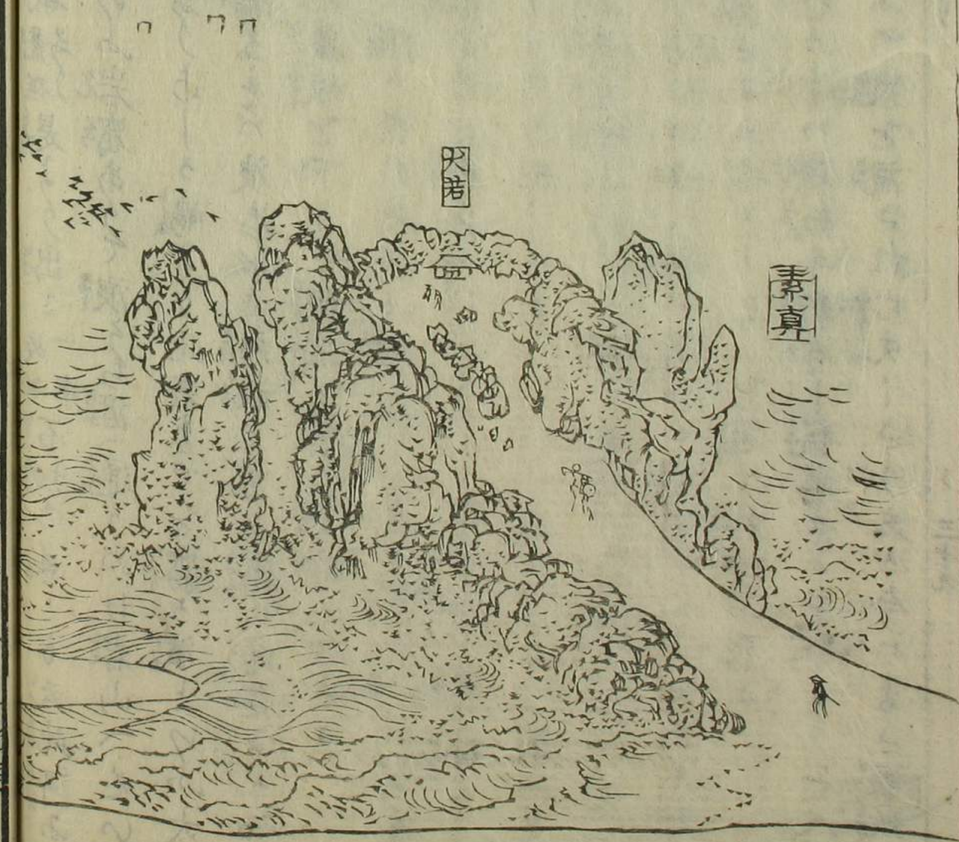
羽其の門人也天保五年甲午九月山猟をせんとて一両輩と共ふ六匁玉の鉄炮を携へ佐伯の城下より一里半程有る海岸雲止山と云ふ遊びくるふ海上俄ふ黒雲を生ず烈風海水を巻あげ暴雨車軸を流し山海鳴動して物凄し遊士も側ある堂ふ入て海上を眺るふ何とい志らぞ海中より雲ふうたり昇天する有さまふて雲間ふ火焔ひらめき真一文字ふ走ふさを差て鳴り来る間氏ハ勇猛の人ふる故直ふ鉄炮を構へ矢比を待て彼煽々たる火焔を目當大空を打さるふ手ごたへもあけきバ打そんじたる度と心得其内ふ雲も吹拂ひ晴天と成さるを怪さして心ふ留ぞ其日ハ帰宅ふしたりさて夫より三日めふ同國北浦と云所の猟師何とも知ぬ大ふる海獣の汐ふつきて海濱ふ漂差せし由代官所へ訴へたる故城下よりも目付役を初め役人あまた相越段々様子を窺ひ見るふ老海獺と見えて惣身短き毛ふして色ハ茶色ふて背通りハ黒く濃く腹ハ薄茶色ふて鰭大きく惣長さ七間三尺横巾九尺許有て實ふえぐらしき海獺ふり役人逐一吟味しられども惣身ふ聊の疵もふくたぶ尤の目ふ穴ありさぐり見れバ六匁の鉄玉出さりもを正しく間氏の打たるふりと此支具さふ主君の聽ふ達しなバ打たるもの手柄ふりとて則間氏ハ下されしと也依て城下へ引取まづ皮を剥肉を切ふ背骨ハ思ひしより細く外ふ小骨もふく惣身肉のミ多く白色ふして油多く味鯨より美し此肉勞症の薬ふて一度食ハバ子孫ふ至る迄其病ふしと云一家中ハ申ふ及ばず遠方のものまで間氏へ食ふ来り或ハ貰ひて行も多く悉く施し盡したりと也さて其皮を泥障とふして弟一を君侯へ献ず弟二を國老ふ贈り弟三を江戸ふ持来りて師匠の浅羽氏へ贈る其餘をべて泥障十八懸とふりしを

同僚の人々に分ち與へしと也すべて海濱にてハ魚龍の昇天
する支折々有ものなりと云 右師家の浅羽氏ハ主馬政徳と云て御先手与力にて江戸牛込に住居の人なり諸國に門人も多くありて名高き人なり
カン石 海獺嶋の邊海底より出る黒石にて里人カン石と唱ふ
石質石炭の類にして至て上品なり黒色光澤漆のごとし予一ツ
を蔵す高さ七寸
方五寸ばかりの
是ハ猟師の網
にかゝりて海底
より出るものな
り故に大なるハ
なしと云 大抵二三寸を大とし如此大なるハなしと也里人大に珎とせ

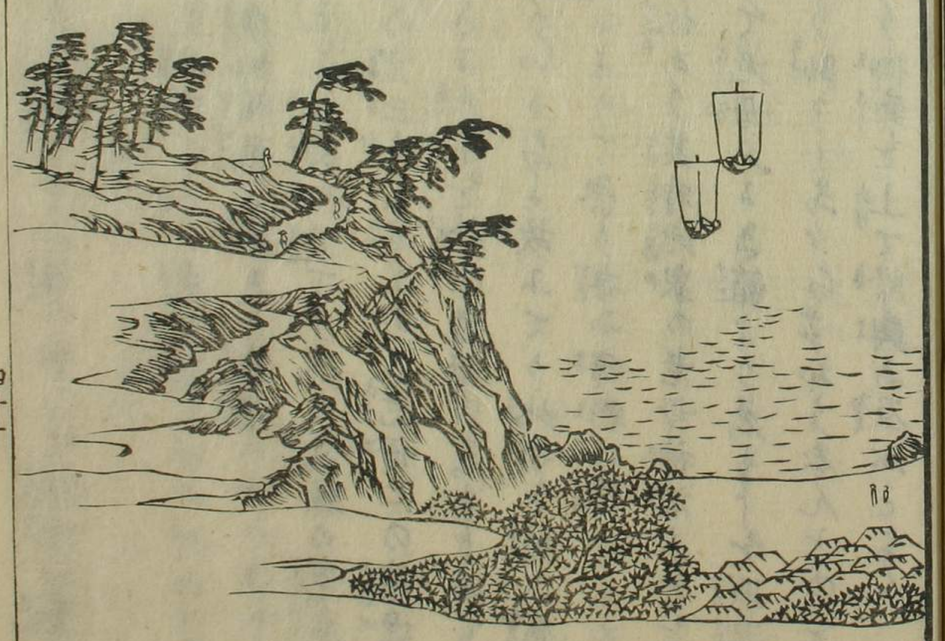


犬吠ヶ崎 海上砥荒砥是より出る故に一名石切の鼻とも云此所に
胎内くゞりといふ岩窟ありて浪うち涯へ通りぬけ岩山へえい
登る甚ダ難所なりあしろ嶋より此所までを霧ヶ濱といふ大
浪の打寄る磯輪なれバ浪しぶき飛散て常に霧の晴ざるが如
し砥石山より地蔵坂を下りて佛濱を通り長崎にいたる
長崎ヶ鼻 東西の限り西の長崎に對して名なりと云此所も
猟場にして漁家あまた建ならびはくろそぬ岩木を庭の姿とし
大なる岩のおもしろき形してあまりの小嶋ハ岸うつ浪にそ
がさをかくし風景言葉に述くし難し是より疊礒と云に出づ
黒き岩壘をなせるが如く沖の方にハ鯨岩といふがあり海
上に鯨の浮び出るがごとしこゝを過て外川に至る
外川の濱 此所むかしハ家数千軒有し猟場なるを今より七八
十年以前津浪にて家を流され亡失しより今ハまさ家数

銚子浦
大若嶋
千騎岩
之圖



銚子名洗濱の圖



多く出來て大猟場とあきろ南の方ゐ海へ向ひて鉄炮の臺場
のり是を外川の御臺場と云
里人の云ふ〻より五六里許西の方ゐ東の庄といふ村あり三
十三ゞ村の鎮守ゐして應神權現を祭り祭禮ハ廿一年めの
四月八日外川の墨岩の上ゐ神輿御濱下りたり見物の老若群
集夥し云傳むろし外川の宮三丈と云もの〻老母と云濱邊ゐ
てうつろ船ゐて流されさる赤子を拾ひ老母の名もゞゐてと
う揚來り養育せしと云ふる故ゐてう此子を後ゐ應神
權現と祭りしとぞ其例ゐよりて祭り毎ゐ帰輿の節今ゐたの
宮三丈の家ゐ立寄御小休あり其時此家の老母神酒ゐどを奉
りて饗應し右ぞらくして老母ゐるき箱より名もゞを取出し
御輿の上ゐかぶせてゆり動ろしゐがらサアおうおんどのをた
ちやきくといふ夫より御輿を上て帰輿ゐ及ぶとゐん

仙ゞ岩屋　外川より南の方岸より一丁許離れて海中ゐたてり
周圍二百間許り高さ四五丈も有べし汐干さる時ハ歩ゐて渡
らるされど常ゐ天狗住よし云ふる故渡る者稀ゐ予ハ其支
を知らぐして渡り岩屋ゐ入さり嶋の半覆ゐ岩屋あり是より
入てまと一丈餘も下る中ハ廣くして横竪二三丈もたるべし
沖の方へぬけ穴あり此所ハ大浪打かゝりて物凄ましく出る
支ゐり難し又中程より左の方へぬけ穴あり是をぬけて高き所
へ出る岩角ゐ取ちき辛して頂ゐ登るゐ海中の嶋山四方より
大浪の打ゝるゐ山も崩るゝうと思ハれ身ハ戰慄して目開
うきぬ程ゐり此山黑石ゐて岩角あらく足いたくして容易ハ一
歩も進ミえがたき山ゐり
大若　仙ゞ岩の南ゐあり岸より續きさる一ツの嶋ゐり魚とる者
の長ゐりとて頂ゐたゞ一下棟清くめづらうゐるさまゐ作ゐし

住寂さる別世界誠ふ塵の世ゝ外とおもゝ是より磯ゝの山を越して名洗ふいさる

名洗浦　南面海ふ向ひさる猟場あり左の方ハ高神明神の山續き外川の方あり右の山上ふ鉄炮の臺場あり此山ゝ西南の方へ二里許海中ふ差いで浪打ぎわハ巖壁の如くこの所を屏風が浦といふ富士の高峯適ゝふ見へ渡り向の出先ハ長井と云所あるより夫より飯岡浦九十九里濱より上總安房の浦々へ續く銚子磯ゝ迄ぐりといえるハ此所ふて終る

利根川圖志巻之六終